



JIC インフォメーション

第228号 臨時号 2024 年 1 月 15 日
年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所: JIC国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<https://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階 TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NSビル 5 階 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



写真は、本紙記事より抜粋

2024 年を日ロ関係『再起動』の年に！……………伏田 昌義…2P
 ≪ロシア関係情報≫ 日ロ協会、日ロ交流協会の講演会ほか…3P
 創価大学・ロシア語スピーチコンテストの報告……………5P
 ≪連載≫ こんな時代にロシア語のすすめ
 「さまよえるカザフ人」……………黒田 龍之助…6P
 ≪本の紹介≫ 「女たちの独ソ戦」、ほか……………7P

≪本の紹介≫ 予告編／『舟』～北方領土・志発島で起きた日本人とロシア人の物語……………榎本 真奈美…9P
 ≪講演要旨≫ 「中ロ国境問題の解決の分析」……………井出 敬二（立教大学法学研究科 講師）……………10P
 ≪講演録≫ 「スラヴ民族—分裂と紛争」……………石郷岡 建（毎日新聞 元モスクワ支局長）……………13P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

ウクライナ戦争、停戦への動きが出てきた今こそ言おう

2024年を日ロ関係「再起動」の年に！

伏田 昌義 (JIC 国際親善交流センター副会長)

2022 年 2 月に始まったウクライナ戦争は、いまだ終結の確かな展望が見えないまま 3 年目に入ろうとしています。この間、米英欧州諸国と歩調を合わせた対ロ制裁措置によって、日本とロシアの交流は、政治・経済・文化・社会全般にわたって事実上の中断を余儀なくされています。

ウクライナ戦争は、昨年 6 月から始まったウクライナ側の反転攻勢が、当初のウクライナ政府の発表や日本の大手マスコミが連日報道したほどには成功せず（ウクライナ軍が押し返した距離は最大で 10km）、膠着状態に陥っています。戦闘の長期化により、前線では消耗戦が繰り広げられており、物量でまさるロシア軍が東部ドネツク州で占領地を拡大しさえしている状況です。ウクライナ軍はもっぱら米英 NATO 諸国からの軍事支援で支えられており、米欧諸国のいわゆる「支援疲れ」にともなって、継戦能力の低下が現実化しつつあります。ゼレンスキー大統領は相変わらず「クリミアを含む全領土の奪還」を目標に掲げ一歩も引かない構えですが、米欧とくにアメリカでは全領土奪還の方針を諦め、現在の戦線（境界線）を前提とした停戦協議を開始すべきだとの議論が広がっています。

「正義論」を振りかざせば、どちらかが倒れるまで戦い続けるしかありません。ゼレンスキー大統領の立場はまさにこれですが、しかし戦争が続く限り、双方の人命と国土の破壊は続きます。もうこれ以上の人命と国土資源の損耗を止めるために、双方不満であっても、まずは現状で停戦を実現し、武力行使のない条件下で長期的な和平交渉を粘り強く進めるしかないと思われますが、いまだその機は十分に熟していないのかもしれないかもしれません。おそらく、この冬から今年夏にかけて、再度ウクライナ軍の反転攻勢が試みられるのですが、その結果を受けて停戦協議が始まるかどうか、まだしばらくは見守るほかないようです。

しかし、仮に停戦協議が始まり、和平への動きが進みだしたとしても、現状ではクリミアと東部 2 州・南部 2 州をロシアが併合した状態は大きく変化しないでしょうから、欧米そして日本の対ロシア制裁措置は今後も相当長期間にわたって

継続されるだろうと予想されます。

同時に、このウクライナ戦争、またパレスチナ・ガザ地区へのイスラエル軍の侵攻をめぐって露呈したように、国際社会では、ウクライナ、イスラエルを支援する米欧日の経済先進諸国と、必ずしもそれに与しないグローバルサウス＝アジア・アフリカ・南アメリカの新興発展諸国との対応の違いが明らかになりました。武力不行使の国連憲章に違反してウクライナに侵攻したロシアを厳しく非難する一方、パレスチナの占領地で国連安保理決議を無視して入植地を暴力的に拡大するイスラエルを擁護し、ガザ地区市民の無差別殺戮とも言える軍事侵攻を支援し続けるアメリカと欧州諸国のダブルスタンダード（二重基準）に、多くのアジア・アフリカ諸国は不信を強めています。

「民主主義・自由主義」を標榜する米欧日に対して、これまで「民主主義・自由主義」の名のもとに、どれほどの搾取と暴力が途上国に対して行われてきたか、そのダブルスタンダードを糾弾し、対等・平等な政治的経済的関係を求めるグローバルサウス諸国の動向が、今日の国際関係において重要な要因となっています。おそらく、G7 に代表される米欧日の経済先進諸国と、G20 や BRICS に代表されるグローバルサウス諸国との、協調と対立のなかで、第二次大戦後に作られた現在の国連体制（その機能は常任理事国＝米英仏露中 5 カ国の拒否権によって半麻痺状態にあるわけですが）を見直し、新しい国際秩序を構築するための模索が続いていくのだらうと思われます。

ロシア、中国、そしてインドなどの諸国が、グローバルサウスに大きな影響力を持っていることは紛れもない事実であって、ウクライナ戦争の後には、米欧日のいわゆる西側諸国としても、ロシアをいかに国際舞台に再度組み込んでいくのが大きな課題となります。

この時、日本としては、ロシアに対して米欧諸国と軌を一にした経済制裁と封じ込めを続けるだけでいいのかどうか、中断したままになっている日ロ平和条約交渉はどうするのか、

お互いに引っ越しのできない隣国であるロシアと今後どのような政治的・経済的・文化的関係を独自に取り結んでいくのかが問われることになります。

昨年 12 月に 8 年間にわたる任期を終了した上月豊久駐ロシア日本大使が離任会見で述べたように、「(ウクライナ戦争以来、平和条約交渉が中断し日ロ関係は停滞しているが) ロシアが隣国であることに変わりはなく、両国の国民の人間的なつながりを維持することが将来の関係を築くうえで重要な基盤になる」ことは間違いありません。

すでにコロナとウクライナ戦争によって、日ロの人的交流はまるまる 4 年間の中断が続いています。このままでは、ロシアを知り、その内的論理を理解したうえで、この国との将来の関係修復を担う若い人材が著しく失われるのではないかと危惧します。

日本国内では、反ロシア・親ウクライナの欧米シンクタンクの一面的な戦況評価ばかりが大きく取り上げられ、欧米諸国でも軍事支援の拡大に反対し停戦交渉の開始を求める人々の声や、ロシア国内での人々の実際の動きなどはほとんど聞こえてきません。米欧の報道機関がウクライナの戦場での取材を果敢に実行し、その塹壕戦の実態をかなり正確に報道しているのに比して、日本ではそのような取材報道が全く見られないのは残念なことです。

日本国内に蔓延する反ロ気分の中で、旅行・観光を通じて日ロの人的交流を下支えする私たちロシア専門旅行社の業務は、2020 年の春以来、縮小と後退を食い止められずにいます。日本からロシアに向かうアウトバウンド旅行は、ビジネス関係者の業務渡航かごく少数の留学渡航に限られ、一般的な観光旅行はまだまだ難しい状況です。一方、ロシアから日本へのインバウンド旅行は、少人数の観光グループの訪日が復活してきているとはいえ、コロナ前の通常水準にはほど遠いレベルです。

私たち JIC は、日本とロシアとの将来の関係再構築の条件を作り出すために、引き続き旅行・観光交流と文化交流の継続に取り組みます。現在、日本の国内世論や人々の対ロ感情は決して良くありませんが、日ロ協会や日ロ交流協会、その他の多くの交流団体と連携して、挫けず、諦めず、粘り強く、将来の関係改善と協力拡大のために、細くなった日ロの関係をつなぎ続けたいと思います。

2024 年を日ロ関係「再起動」の年に！

皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

日ロ交流情報

活発化してきた各団体の動き

昨年秋から年末にかけて各地で行われた日ロ交流団体の活動で、いくつか目についたものを紹介します。コロナ禍、ウクライナ戦争で逼迫していた交流活動にもようやく活発化の兆しがでてきました（編集部）。

日本ロシア協会の講演会（12 月 23 日）

『ロシア芸術とわたし』～亀山郁夫氏

12 月 23 日、東京の鳩山会館（文京区音羽）にて、日ロ協会（高村正彦会長）の講演会が開催されました。講師は、ロシア文学者の亀山郁夫氏（名古屋外国語大学学長）。「ロシア芸術とわたし」と題して、主に亀山先生の音楽遍歴、その中のロシア音楽の魅力、とくに 20 世紀の作曲家の双璧をなすセルゲイ・プロコフィエフとドミトリー・ショスタコービッチについて話されました。

講演会後のアトラクションでは、バラライカ奏者のマキシム・クリコフさんが、ロシアと日本の楽曲をメドレー演奏し、参加者の盛んな拍手を浴びました。



ソプラノ歌手・天野加代子さん

在大阪ロシア領事館でコンサート

12 月 16 日、「天野加代子と日ロの素晴らしい仲間たち 2023」と銘打って、ソプラノ歌手・天野加代子さんのコンサートが、大阪府豊中市のロシア総領事館で開催されました（関西日ロ文化サロンとの共催）。コンサートには天野ファンや大阪のロシア関係者約 100 名が参集して、その美しい歌声を堪能しました。また、2 人のプロ・バレリーナがゲスト出演し、可憐なダンスを披露しました。

天野加代子さんはロシア国立モスクワ音楽院声楽研究科を修了後、外国人で初めてモスクワ国立音楽協会専属のソリストとなり、毎年ロシアと日本の各地でコンサートを行っています。

「現在のロシアを知る」ことが大事

大阪日ロ協会が講演会(11 月 10 日)

大阪日ロ協会（藤本和貴夫理事長）の「現在のロシアを知る」講演会が、11 月 10 日、大阪市内のエル大阪にて開催されました。講師は五十嵐徳子・天理大学国際学部教授。「コロナ前後のロシア～見て、聞いて、感じた 2020-2023 年 雑感」と題して、最近のロシアの状況がたくさんの写真やビデオをつかって紹介されました。講演では、コロナやウクライナでの戦争があっても、隣国ロシアへの関心を持ち続け、ロシアの人々の実際の姿を知ることの重要性が話されました。

また、講演会には、ホームステイ交流で来日していたペテルブルグ露日友好協会のダーンシナ・ソフィアさんが飛び入り参加。ペテルブルグで活発に続けられている日本語教室や生け花、折り紙教室の活動などが紹介されたことも有意義でした。



情熱と哀愁のロシア音楽の夕べ

TENGO のコンサート(10 月 29 日)

ヴァイオリン（天野紀子）とアコーディオン（後藤ミホコ）のユニット・TENGO のライブが、10 月 29 日、大阪・梅田でありました（関西日ロ文化サロン主催）。「黒い瞳」に始まって、日本の歌曲やハンガリー舞曲なども間にはさみながら、ロシアのクラシック音楽とロシア民謡（ポーリシュカポーレ、カリンカ、カチューシャ、ともしび、遠い道など）がぎっしり詰まったとても楽しい演奏会でした。

ウクライナ戦争で、ロシアの音楽や文化・芸術を楽しむこ



とすら憚られる空気がありますが、それでもロシアは数々の文学者、音楽家、舞台芸術家を輩出してきた国。その文化に触れることで、ロシアを理解し、将来の平和な関係を築く基礎を作っていく必要があると思います。

日ロ交流協会の講演会（11 月 26 日）

「中国・ロシア国境交渉を振り返る」

11 月 26 日、東京・港区の新橋生涯学習センターにて日ロ交流協会（服部文男会長）の講演会が開かれました。

「中ロ国境問題の解決の分析」と題し、元外務省職員の井出敬二氏（立教大学法学研究科講師）が中国、ロシアの日本大使館に外交官として勤務した経験を踏まえて、中ロ国境交渉の解説と、中国とロシアとの関係について講演を行いました。（講演要旨は本誌 10 頁に掲載しています）

鎌倉国際交流フェス（11 月 5 日）

湘南ロシア倶楽部がピロシキ販売

鎌倉大仏（高德院）の境内で毎年行われている鎌倉国際交流フェスティバルに、今年も湘南ロシア倶楽部（渡辺雅司理事長）が市内 15 の国際交流団体とともにブースを出しました。今年の「目玉商品」は淡路島のロシアンキッチン・イリーナ



から取り寄せたピロシキとビーフストロガノフ。JIC もロシアの塗絵や中央アジア産の食材を提供して協力しました。人気はやはりピロシキで、この日たまたま観光で訪れた人も含めて多くの参加者が『ロシアの味』を楽しみました。

日ロ友好愛知の会が連続講演会

ロシア的なものとは…私の感じ方

亀山郁夫先生の土曜講座

日ロ友好愛知の会（小林功理事長）は、昨秋、愛知ロシア音楽研究会と協力して、名古屋外国語大学の亀山郁夫学長を講師に、連続講座を開催しました。「ロシア的なものとは～私の見方、聴き方、感じ方」と題して、10月7日、11月25日、12月16日と3回連続で、ロシアの音楽と文学を中心に、亀山先生が『ロシア的なもの』について、その魅力をたっぷりと語られました。

ロシア語映画発掘上映会（12月24日）

ガイダイ監督最後の作品を上映

前号で紹介した守屋愛さんのロシア語映画発掘上映会が12月24日、東京港区の札ノ辻スクエアで開催されました。上映されたのは、1960～70年代のソ連で絶大な人気を誇ったレオニード・ガイダイ監督のコメディ映画「デリバソフスカヤ通りは晴あるいはブライトン・ビーチはまた雨」（1992年作）。公開されたのはソ連解体後ですが、製作されたのはペレストロイカ期のソ連時代末期で、ソ連ネタ満載の笑える映画でした。

上映後は、筑波大学の梶山祐治氏が「ガイダイとペレストロイカ映画」と題してミニ解説を行いました（写真）。



なお、ロシア語映画発掘上映会は、この1月7日にも行われ、ヴァレリー・トドロフスキー監督の「スチリャーギ」（2008年作）が上映されました。今年もまだまだ上映会の企画が続きます。



第31回創価大学ロシア語スピーチコンテスト

優勝者は上智大学の梯さん

いま、日本国内にはロシア語の能力を競い合う催しがいくつかありますが、中でも創価大学のロシア語スピーチコンテストは知名度が高く、規模が大きいものの1つです。

昨年12月17日、私はこのスピーチコンテストへ来賓として出席してきました。私たちJICはこのコンテストに長年協賛していて、優勝者に賞品を提供しているのです。

コンテストはエレメンタリー部門とスタンダード部門（対面・ビデオ）に分かれていて、ロシア語を学習中の人なら誰でも出場できます（ただしロシア語能力には制限があります）。エレメンタリー部門は全員共通の課題文の暗唱、スタンダード部門は自作のスピーチを行います。去年からはスタンダード部門に事前収録ビデオでの出場形態が加わり、遠方からの出場のハードルが格段に下がりました。

コンテストには、全国各地から21名の弁士が出場し、みなそれぞれにロシア語学習への情熱を披露しました。

- ・エレメンタリー部門第1位は岩岡正悟さん（ロシア極東連邦総合大学函館校）
 - ・スタンダード・ビデオ部門第1位は黒澤百果さん（社会人）
 - ・スタンダード・対面部門第1位は梯 桃真さん（上智大学）
- 梯さんには「創始者賞」が授与され、JICからは賞品として、サンクトペテルブルグの語学学校でのロシア語オンラインレッスン（8日間）の目録をお渡ししました。

実は私たちは長年、モスクワ往復航空券を優勝賞品にしていました。しかし日本では、多くの学校が、安全上の理由から学生にロシアへの渡航を禁じています。学生さんが優勝した場合、せっかく航空券を受け取ってもそれを使わせてもらえない事態が発生する可能性が大きいため、22年から賞品をオンラインレッスンに切り替えたのです。

新型コロナとそれに続く戦争で、ロシアへの留学生が壊滅的に減少し、すでに数年が経過しました。このままでは、将来専門家となるべき人材が枯渇してしまうことを真剣に懸念しています。また、航空券を賞品として提供できる日が戻ることを強く願っています。（報告；岡本健裕・JIC 大阪）

こんな時代にロシア語のすすめ 第6回

「さまよえるカザフ人」

黒田 龍之助



カザフ人たちが目指したかったスポーツ街

大失敗をやらしました。

先日 JIC のスタッフと、都内のモルドヴァ料理店へ行くことになりました。最近はいろんなレストランがあるのですね。もちろん旧ソ連関係となれば、こちらは何でも興味津々ですし、そもそもモルドヴァ料理なんて初めてですから、とても楽しみにしていました。当日は現地集合で、わたしは大学の授業終了後に余裕で向かったつもりだったのです。ところが駅に着いて、いくら探してもお店が見つかりません。

おかしいな。

そこで急に気づきました。

お店の場所は亀有。

だけどわたしがいるのは亀戸。

なんという間抜けな間違いでしょう。東京人にあるまじき失態。慌てて亀有に向かったのですが、30 分以上も遅刻。恥ずかしいやら、面目ないやら。ちゃんと到着していれば、おいしいモルドヴァワインをもう 1 本くらい飲めたのに……。

地名は似ていることがよくあります。都内では千川と仙川とか、千駄木と千駄ヶ谷など、気をつけないと違う所に行ってしまう。

ロシアではどうでしょうか。知らない人にとっては、ナントカブルグとか、ナントカグラードとか、みんな似ているように感じるかもしれません。

知人がエカテリンブルグへ赴任することになったのですが、家族から素晴らしく美しい街なんだってね、行ったことはないけどといわれ、はて、そんな話は聞いたことがないと思い、よくよく聞いたらサンクトペテルブルグと間違えていたそうです。

外国語を学習するとき、似ている単語には気をつけなければなりません。それはロシア語でも同じ。ところが人間ですから、どうしても間違えてしまうのです。一方、こちらは長年ロシア語の教師をやりながら、学習者の間違い方のパターンの傾向を、次第に把握できるようになりました。

たとえばヂェーヴシカ девушка「娘、女の子」と、ヂェードゥシカ дедушка「おじいさん」。どちらも人間を表す単語であるうえに、変化パターンも同じですから、作文しても文

法的には間違っていない。ある男子学生が「わたしは昨日おじいさんと公園を散歩しました」と書いてきたので、なんと優しい孫か、あるいは介護ボランティアに興味があるのかな思っていたら、本人は彼女とデートしたというつもりだったことがありました。

間違え方にはもう 1 つ、英語からの類推というのがあります。

たとえばファミリーや фамилия はロシア語で「名字」という意味です。ところが英語を知っているので、つい「家族」と間違えてしまう。「わたしの家族」のつもりで моя фамилия といったら、ロシア人は混乱するでしょう。

しかしこういう間違いは、日本人だけがするわけではありません。

ある週末、わたしは神田神保町を歩いていました。ご存じのように、ここは古書店の多い街として広く知られています。英米語専攻の学生といっしょだったのですが、このときは古本屋巡りが目的ではなく、なんとなく九段下から市ヶ谷方面でも散歩しようかと思い立ち、2 人でふらふら歩いていたところだったのです。

わたしたちの数メートル先には、外国人らしい 3 人連れが歩いていました。欧米人のように見るからに違う人たちではないのですが、かといって中国や韓国の人ほど近くもない。いったいどこの国から来たのでしょうか。まあ、最近の東京は海外からの観光客が増えましたから、どんな地域の人が歩いていても不思議はありません。

するとそのうちの 1 人がくると振り向き、わたしたちに英語で話しかけてきました。その英語が断片的で、ひどく聞き取りにくいのです。

「ウィル・ユー・ヘルプ・ミー？」

これは分かります。ところがそのあとです。

「……ミズーナ……。……マガジーン……」

はて、何のことでしょう。ミズーナなんて知りません。マガジーンは英語で雑誌の意味ですから、古書街で雑誌を探しているのでしょうか。いったいどんな雑誌なのか、だいたい

その人はその雑誌が読めるのか。ところがいくら問い質しても、それ以上はどうにも分からないのです。英米語専攻の学生も首をかしげるばかり。ヘルプしたくてもこれ以上は無理。相手も諦めて、残りの 2 人のところに戻りました。

いったい何を求めていたのでしょうか。そもそも出身はどこだったのでしょうか。相変わらず前を歩く 3 人連れを眺めながら、わたしはずっと考えていました。

そのときでした。わたしは 3 人のうちの 1 人が背負ったカバンにある文字に気づいたのです。そして思わずアッと小さな声が出ました。

QAZAQSTAN

これってカザフスタンと関係があるのではないのでしょうか。としたら.....。

わたしは横断歩道で信号待ちをしている 3 人に小走りで追いつき、ロシア語で話しかけました。失礼ですが、ロシア語分かります？ ひょっとしてカザフスタンの方ではありませんか。

相手はわたしのロシア語に最初は驚いていましたが、やがて嬉しそうにズドラーストヴィチュェ Здравствуйте! といいながら握手を求めてきました。

いや、握手はいいんだって。

何を探していращやるのか、もう一度、今度はロシア語でいっていただけますか。

相手は相変わらず「ミズーナを探している」というのですが、相手はロシア語を話しているとなれば、急に勘が働きます。

それって、ミズノスポーツのことでしょ？

「スポーツ」という単語に、3 人の表情は一挙に明るくなりました。

神保町に隣接する小川町はスポーツ街として有名で、スキーやサーフィンなどの用具を扱う店が軒を連ねています。ミズノスポーツはそのうち大手の 1 つで、小川町には東京本社に加えて大型店舗もあります。ミズノといってくればすぐに分かるのですが、アクセントのない「オ」を「ア」と発音してしまうロシア語の癖のせいで、ミズーナになってしまったのでした。

ではマガジーンはどうでしょう。これは英語の magazine 「雑誌」ではなくて、ロシア語の магазин 「店」だったので。英語の中にロシア語を混ぜられちゃ、さすがのロシア語教師でも咄嗟に判断できません。でもやっと分かりました。

しかしミズノスポーツに行きたいとしたら、向かっているのは正反対です。そのままいったら靖国神社ですから、スポーツ用品は買えませんよ。今来た道に戻れば、やがて見えてきます。いいですか、ずっとまっすぐですよ。

相手は安心して逆の道を進んで行きました。

英語のマガジーンとロシア語のマガジーン。カザフ人にと

っては両方とも外国語。やっぱり混乱することがあるのですね。ちなみに QAZAQSTAN というのは、カザフスタンのテレビ局らしいです。もしかして何かの取材だったのでしょうか。

なに、大したことはありません。彼らはちょっと道に迷っただけです。神保町と小川町だったら、亀有と亀戸よりはずっと近いですから。

本の紹介

「女たちの独ソ戦」 ～彼女たちはなぜ戦場に行ったか

ロジャー・D・マークウィック、
ユーリディス・シャロン・カルドナ 著
五十嵐徳子、河本和子、藤原克美 訳
東洋書店新社
価格 4,400 円(税込)



重いテーマだ。第二次世界大戦中、数十万の女性たちが戦場に赴き、ソ連に侵攻するナチス・ドイツと戦った。独ソ戦の勃発とともに数多くのソヴィエト女性（フロントヴィチカ／その多くはコムソモール活動家だった）が、前線行きを志願した。彼女たちの希望に反して、その大半は看護師や防空、消防、塹壕掘りなどの後方支援活動に回されたが、中には狙撃兵、飛行士、パルチザン戦士として、前線での軍事行動に直接参加し、戦死ないし深刻な障害を心身に負った女性兵士も多くいた。こういった「軍務」に就いた女性の総数は 100 万人と言われる。

なぜ、スターリン体制下のソ連でかくもたくさんの女性が戦場に赴いたのか。ナチスの「絶滅戦争」の地獄とスターリンの赤軍で、彼女らはどう扱われたのか。

本書は、独ソ戦においてソ連女性がなぜ、いかに戦ったかを解き明かすべく、オーストラリアの 2 人の歴史学者が刊行した“Soviet Women on the Frontline in the Second World War, New York, 2012”の全訳である。

本書まえがきによれば、当初の研究動機は別にあった。極端に抑圧的で過酷な性質を持つ 1930 年代のスターリン主義国家という条件下で、何百万人ものソヴィエト市民が、男性も女性も、明らかに積極的に、ドイツのファシズムから「母

国」を守るために非常に粘り強く戦った理由は何なのか、それを知りたいというのが最初の動機だった。これまでのソ連研究において、スターリン主義の暴力的・抑圧的な特質と、それに対する人々の抵抗については多くの研究成果が発表されている。独ソ戦においても、残虐なドイツ軍から否応なく身を守るために、あるいは政治的・思想的理由から、対独協力したソ連市民はいたが、しかし「協力者」は少数派で、圧倒的多数は、戦争初期に赤軍が壊滅的な敗北を被った後も、彼らの祖国に忠実であり続けた。スターリン主義にもかかわらず、ソ連市民の大多数がソヴィエト国家と一体化してナチス・ドイツに立ち向かった理由として、著者らは、「1917 年の十月革命によって引き起こされた政治的、社会的、経済的变化と、それに続く 1930 年代の大規模な転換」「政治言説を独占した国家の監督下で起きた戦前の 10 年間における産業、人口、教育の大規模な変化」が、このような大衆の国家への献身を生み出したという仮説を立てる。その例証として、独ソ戦へのソ連女性の軍事参加が取り上げられたわけではあるが、はからずも独ソ戦においてソ連女性たちがどのように戦い、スターリン主義国家からどのように扱われたかを具体的、実証的に解き明かすものとなった。

本書では、有名な女性志願兵の例として、「夜の魔女」爆撃航空連隊、地下抵抗運動とパルチザンの女性兵士、女性狙撃手、女性のみで編成された女性義勇狙撃旅団などが取り上げられる。

戦争中のソヴィエト女性の戦いについては、従来、型にはまった英雄的・愛国的物語が中心だった。「戦争は女の顔をしていない」（スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ、1985 年／2004 年新版）は、前線で従軍した女性たちの体験を主にインタビューで発掘し、ソ連時代に流布された戦時下の女性たちの英雄的活動の暗黒面を抉り出したが、本書はそれを、ソ連時代の刊行物や最近公開された公文書（歴史資料）、さらに将校や政治委員の報告書、コムソモールや共産党の議事録、回想録なども駆使して分析し、当時のソ連社会と女性兵士たちの状況を包括的に描き出している。アレクシエーヴィチが収集した女性兵士たちのインタビューが、その「生の声」の持つ臨場感と説得力を有していた反面、人間の記憶が持つ制約と偏向を免れなかったのに比べ、本書は可能な限り客観資料に基づいて歴史的事実を描き出そうとしているところに特徴がある。

それまで男性の領域とされていた労働分野への女性労働者の進出がソヴィエト社会において著しく進んだことと併せて、女性の戦争への直接参加は、スターリン主義社会主義国家の何ごとかを確かに物語っている。しかし、それらがその後のソ連社会・ロシア社会における女性の地位にどのような変化を与えたのか、おそらく翻訳者たちの問題意識もそのへんにあったのではないかと思われる。(F)

本の紹介

「マトリョーシカのルーツを探して」

～「日本起源説」の謎を追う～

熊野谷 葉子 著

岩波書店

定価 2970 円(税込)

ロシアのお土産として有名なマトリョーシカ。日本のこけしに似たずんぐりした体形の入れ子人形で、中から次々と一回り小さい人形がでてくる。このマトリョーシカが、日本の入れ子七福神をモデルに作られたという説は本当だろうか？



「描かれている女性がロシアの民族衣装である『サラファン』（肩ひも付きロングスカート）と『プラトーク』（スカーフ）を身に着けていることもあって、マトリョーシカは昔からある民衆工芸品だろうと思われがちだが、実はその存在は 19 世紀末までしか遡れない。しかも農民が自分の子どものために手作りした素朴な民衆玩具などではなく、最初から都会の店で販売することを目的として考案され、腕利きの木工職人が高速回転する木工ろくろで木屑を散らしながら削り出していた、いわば民衆風木工品である。

というのは確かなのだが、実はマトリョーシカ誕生の詳しい経緯は謎につつまれている。誰がいつ考案し、誰が最初に木を削ってあのフォルムを作り出し、誰が女性の姿かたちを描いたのか。たった 120 年ほど前のことだというのに、そしてこんなに有名な工芸品だというのに、実はそんなことも分からない...」（プロローグより）、と著者は言う。

「マトリョーシカ日本起源説」とは次のような言説だ。

- ①明治期、日本にきたロシア人が、入れ子の箱根七福神人形を持ち帰った。
- ②モスクワ郊外アブラムツェヴォ村で、ロシアの鉄道王マーモントフの妻エリザヴェータがそれをもとに人形を作ることを発案した。
- ③ろくろ師ズヴォーズドキンが型を挽き、画家マリューチンが絵付けをしてマトリョーシカが誕生した。
- ④マトリョーシカは 1900 年のパリ万博に出品され、メダルを獲得して有名になった。

この日本起源説は 1960 年代から日本でもロシア（ソ連）

でも言われ始めたが、1990 年頃に NHK が取材報道したことで広く知られるようになった。「ロシアの人気お土産人形が日本にルーツがあるなんて、面白いじゃないか」というわけで、日本でのマトリョーシカ人気に火がついた面もある。

しかし、著者が調査を進めていくと、これらの説はすべて具体性を欠いた不確かなものになっていく。マーモントワ夫人が明治期に来日した事実はないし、日本にいたロシア人が持ち帰った証拠もない。何よりも、マトリョーシカ誕生に関わったのはエリザヴェータではなく、その親戚で、「子どもの教育」という玩具・雑貨店をモスクワで営んでいたマリヤ・マーモントワだった。初期のマトリョーシカにはいろいろな絵柄があるし、工房や製作者についてもいくつかの説が出てくる。こうして、「日本起源説」は一種の伝説に過ぎないことが早くもプロローグで明らかにされる。

ところが、本書はここで終わらない。いや、ここからが本番なのだ。著者は、第 1 部ロシア編「マトリョーシカ誕生をめぐる」、第 2 部日本編「入れ子七福神を探して」と、二段階に分けて本格的な探求を開始する。ロシアでのマトリョーシカ誕生をめぐる事実関係と、その生産が始まった 19 世紀末の経済社会関係、挽き物＝轆轤（ろくろ）で製作された木工細工の生産と流通過程、同じく日本での挽き物の歴史と明治・大正期の箱根細工の生産・販売経路をたどることで、日本とロシアでの大衆民芸品の誕生と生産・販売の意外な類似性が見えてくる。

かといって本書は堅苦しい学術書ではない。ロシアと日本での聞き取りと調査をベースにした「マトリョーシカの謎を追う」楽しい読み物となっている。マトリョーシカ好きの読者に是非手にとっていただきたい一書である。(F)

本の紹介 《予告編》

『舟』～北方領土、志発島で起きた日本人とロシア人の物語

榎本 真奈美（翻訳者）

ロシア人脚本家マイケル・ヤングの書き下ろし小説『舟』が今春刊行予定だ。

ヤングは、亡き友人アンドレイ・ラクーノフ〔映像作家、ウラジオストク国際映画祭上映責任者、2020 年没〕の家族にまつわる出来事をもとにこの作品を書いた。

「南クリル諸島(南千島)で起こった日本人とロシア人の友情、人間の決断と運命について書いた物語」とは著者の言葉だ。

舞台は志発島(しほつとう)、歯舞諸島を構成する島の中で最大

の面積を有する島である。

第二次世界大戦でソ連軍は日ソ中立条約を破って参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後、千島列島を占拠した。1945 年 2 月、米英ソ 3 国のヤルタ首脳会談において、ソ連の対日参戦の条件にソ連への南樺太の「返還」と千島列島の「引き渡し」を決めるヤルタ密約があったことなど、当時の一般庶民が知る由もない。北方四島には同年 8 月 28 日にソ連軍が択捉島に上陸、それから国後島、色丹島、歯舞群島に順次進攻した。9 月 2 日に米戦艦ミズーリー号で降伏文書の調印式が行われたが、その後の 9 月 5 日に北方四島のすべてが占領された。

終戦当時、北方四島に暮らす民間の定住者は 1 万 7000 人いたが、北海道に比較的近い国後、色丹、歯舞群島の住民の半数以上は、終戦から約 3 ヶ月の間に所有するポンポン船や櫓漕ぎ舟を使って、ソ連軍に見つからないよう自力で脱出した。

1946 年 12 月、連合軍司令部とソ連代表との間で「ソ連地区引揚げに関する米ソ協定」が調印される。北方四島を含め千島列島の引揚げ希望者全員がソ連側の貨物船で樺太の真岡にいったん移送され、そこから日本の引揚げ船によって順次函館に送還された。1949 年の最終引揚げ船(千島列島からは計 3 回)が出るまでにソ連本土から一般のロシア人の入植がはじまり、日本人とロシア人の間に数年間の「共生」期間がうまれる。

アンドレイ・ラクーノフの母親リュドミーラは子どもの頃、まさにこの時期に志発島に移り住んだ。ソ連政府は仕事と住居を保証することで、民間人に対して千島列島への移住を募集した。応募した男性の多くはドイツ戦で負傷し、故郷に帰還するも職につけない人たちが多かったという。リュドミーラの父親もそのひとりだった。

1947 年に島から日本人が強制送還される日、リュドミーラは姉ガリーナと兄ゲンナージー、近所の友人と 4 人で「箱舟」に乗り沖に流されてしまった。天候が悪化し、ロシア人が救出を試みるもうまくいかなかったところを、ある日本人漁師に救出された。日本人島民は当時、引揚げ船を逃すと日本に二度と行けないと言われていたにも関わらず、助けに出たという。

大陸から新たに入植したロシア人は海の知識に乏しく船の操縦も不慣れだったため、引揚げを待つ日本人と「共生」する間に漁の技術を学んだ。島に残った日本人が所有していた船はすべて没収され、逃げないように銃で撃たれ穴を空けられた船も多かったという。ロシア人は日本人漁師と二人一組のペアになって操縦を習得した。日本人に対しては、魚を入れる木箱を舟の代わりにして釣りをしたり、移動することは許されたという。先に触れた「箱舟」とはまさにこの木箱のことで、子どもたちはこの箱舟に乗って沖に流されたのだった。

アンドレイは「命を救ってくれたあの日本人とその子孫を探して欲しい」という母親の遺言を守り、ソ連崩壊後にビザなし交流に何度か参加してこの日本人を探そうと試みたそう。残念ながら、聞きなれない日本人の名前を正確に覚えていなかったのか、それらしき人の手がかりは見つけられなかったという。

『舟』は、アンドレイが母親から伝え聞いた救出劇が物語の核になっている。

1947 年、日本人強制送還の日。ロシア人との「共生」生活も約一年が経った頃、島の沖に見慣れぬ貨物船がやってくる。ベテラン漁師の浩は息子の勇夫と一緒にいつも通り海に出て魚を釣るが、ふたりが乗る船はエンジン付きのポンポン船ではなく「箱舟」だった。浩は船の操縦と漁のやり方をロシア人に教えるうちに、互いに信頼関係を築いてゆく。他、日本の船職人のもとで船作りを学ぶニコライ、その娘のカーチャと勇夫の恋心、誠とヴェーラの秘密の逢瀬、強制送還の任務を担った内務人民委員部の冷酷なフロロフ、ソ連当局と日本人の狭間で苦悩する日本語通訳のカジン、引揚げ船に「もっこ」で吊られて乗せられる日本人、ロシアの子どもたちの遭難、決死の救出劇……。

大陸から入植したロシア人と故郷を追われる日本人、それぞれが織りなす人間ドラマには単純な二項対立をはるかに超えた魅力がある。ロシア人がロシア人の目線で描いた終戦後の北方四島にまつわる物語は珍しく、ロシア人の微妙な心情も描かれているところが面白い。

この作品を翻訳しながら、ロシアと日本でこの事件に関する情報収集と裏付け作業を進めた。

幸い、亡くなったアンドレイの妹が現在色丹島に暮らしていて、同じく母親からこの救出劇のことを聞いて育ったということがわかった。しかも、母親と一緒に箱舟に乗っていた叔母のガリーナさんがウラジオストク近郊の町にご存命で、この救出劇をはじめ当時の暮らしぶりを直接語ってくれることになったのだ。貴重な家族写真も提供してくださったのでとても感謝している。

本書ではガリーナさんのインタビューの他、この家族と同じ時期に志発島に移住し、この「箱舟救出事件」のことを書き記したロシア人の証言も収録する。ロシア人の大人たちが慣れない船で救出を試みたが失敗したこと、海を知り尽くした日本人漁師が風向きや潮の流れを考慮して 6 キロメートルも流された子どもたちを見事に救出したことがわかったのだ。当時の入植したロシア人から見れば神業に見えただろう。いつばう、日本人漁師にとってはそう難しいことではなかったのかもしれない。だから周囲や子孫に語り継ぐこともなかった……。日本側に証言が見つからないのはこうした事情だと推測している。

ガリーナさんのインタビューより

私たち家族はこの日本人のことをいつも思い出し、子どもたちにも語って聞かせました。そして、いつしかこの物語が私たち家族だけでなく、たくさんの人々の財産になったのです。私たち家族が持つ記憶がもっと沢山の人の目に知られ、人々が互いに思いやり助け合うよう、大切なことを理解する手助けになるように願っています。

他、12 歳まで志発島で暮らし、ロシア人との共生期間と引揚げを体験された木村芳勝さんのインタビューも収録、『舟』は筆者が翻訳し、皓星社より今春、出版予定。

日口交流協会講演会／23 年 11 月 26 日／講演要旨

「日口、日中の外交の現場に立って」 中口国境問題の解決の分析

講師；井出敬二氏（立教大学大学院法学研究科）

私は 1987 年に外務省に入り 2020 年に退職した。その間、ロシアと中国の大使館で外交官として勤務した。2017 年に出版した本「＜中口国境＞交渉史—国境紛争はいかに決着したのか？」に書いた内容をもとに、ロシアと中国の国境交渉について解説したい。

* * *

ロシアと中国の関係史は、「タタールの軛」と呼ばれるモンゴルがロシアを間接支配していた時代（13～15 世紀）に遡ることができる。学問的な定説があるわけではないが、モンゴルの支配はロシアの中央集権的で垂直的な統治スタイルに影響を与えたのではないかとされている。

1618 年、明の万暦帝の時代にロシアはペトリンという最初の公使節を中国へ派遣した。その後、中国は清の時代になるが、ロシアのシベリア東進にともない、1652 年に清とロシアの最初の武力衝突が起こり、翌年ロシアはネルチンスク（現在のチタ市の東方 200km）に砦を築いた。その後もいくつかの衝突があり、結局、1689 年にネルチンスク条約が結ばれて、アムール川の支流アルグン川の西側と、アムール川（黒龍江）とスタノボイ山脈（外興安嶺）を結ぶ線に最初の中口国境が定められた。ネルチンスク条約は清がヨーロッパの国家と締結した最初の対等な条約である。

国境交渉開始前の歴史関係

その後も 18～19 世紀を通じてロシアの東進と南下は続き、1858 年の璦琿条約で清はアムール川（黒龍江）以北の領土を失い、アムール川に合流するウスリー川の東側（沿海州）は両国の共同統治とされた。しかし、1860 年の北京条約で清は沿海州もロシアに獲られてしまった。ネルチンスク条約時の領土と比べて、清は約 150 万 km²（日本の面積の 4 倍）をロシアに奪われたというのが、中国の言い分である。璦琿条約が結ばれた中国・黒龍江省の黒河（対岸はロシアのブラゴベシチェンスク）には璦琿歴史陳列館という歴史博物館があり、ここには中国から見ていかに多くの領土をロシアに奪われたかを示す様々な展示がある。

中国とソ連・ロシアとの国境は、ロシア極東—モンゴルと接する東部国境とは別に、西部国境もある。ソ連時代には、モンゴル—ロシア—カザフスタン—キルギスタン—タジキスタンと西部で接していたが、現在の中口西部国境はモンゴルとカザフスタンの間のごく短いものである（約 54km）。

20 世紀に入って中国とロシアで革命が起こった。中国は辛亥革命（1911 年）で中華民国となり、ロシアでは十月革命（1917 年）で帝政が倒れソ連邦が成立した（1922 年）。1924 年にソ連と中華民国は国交を結び、1925～26 年に国境交渉を行ったが、これは決着しなかった。この時の詳しい交渉内容は明らかになっていないが、ロシア（ソ連）の外交官が書いたものでは、中国側はかなり大幅な領土要求を行ったと言われている。その後もソ連と中華民国の間で国境紛争があり、1929 年にソ連はアムール川とウスリー川の合流点にある中洲＝大ウスリー島やタラバロフ島（中国では両方とも黒瞎子島）を占領してしまった。

国境交渉第一段階（1964 年 2 月～8 月）

第二次大戦後、1949 年 10 月に中華人民共和国が成立し、1950 年 2 月に中ソ友好同盟相互援助条約が締結され、中ソ蜜月時代が始まった。しかし、1960 年代に入ると中ソ論争が起こり、国境問題が顕在化する。中国側は、璦琿条約、北京条約は「不平等条約」だと非難する。

実は 1964 年の 2 月から 8 月にかけて第一段階の中ロ国境交渉が行われた。この時、中国は周恩来が外交交渉にあたり、「清の時代に結んだ条約は不平等条約ではあるが、それはそれとして、現在の状態を前提として交渉を行う。つまり 150 万km²の領土要求はしない」という姿勢だった。ところが 7 月に毛沢東が『ちゃぶ台返し』をやってしまう。毛沢東は、日本社会党訪中団との面談で、第二次大戦におけるソ連の領土拡張を激しく非難し、「（ロシアは璦琿条約と北京条約で）ハバロフスク、ウラジオストク、カムチャツカ半島を含めてバイカル湖以東をすべて切り取った。われわれはまだこのツケを清算してもらっていない」と爆弾発言をして、これで毛沢東の存命中はソ連との国境交渉は進まなくなった。

国境交渉第二段階（1969 年 10 月～78 年 7 月）

1966 年に文化大革命が始まり、ソ連大使館に紅衛兵が押し掛けるなど、中ソ関係は緊張した。そして、1969 年 3 月にダマンスキー島事件が起こる。アムール川（黒龍江）の中洲＝ダマンスキー島（中国名：珍宝島）で武力衝突があり、中ソ合わせて 100 名以上が死亡した。当時、中国はソ連が先に手を出したと激しく非難したが、今日ではこれは中国側が仕掛けた事件であったとみなされている。

ダマンスキー島事件を受けて、1969 年 10 月から 78 年 7 月まで、第二段階の国境交渉が行われたが協議はほとんど進まなかった。

国境交渉第三段階（1987 年 2 月～91 年 5 月）

1976 年に毛沢東と周恩来が相次いで亡くなり、中国は鄧小平の時代になる。ソ連では 1985 年にゴルバチョフが書記長に就き、ペレストロイカが始まった。ソ連と中国の間で 1987

年 2 月から第三段階の国境交渉が行われ、東部国境交渉は 91 年 5 月にほぼ妥結、西部国境は 94 年に決着した。

1989 年 5 月にゴルバチョフが訪中して首脳会談を行ったとき、鄧小平は帝政ロシアが不平等条約によって中国から 150 万km²の領土を奪った、ソ連は 1929 年に黒瞎子島を占領したと長々と述べたが、最後には「これらの問題（歴史上の負債）は帳消しにしよう。…語り合えば用事が済み、過去に終止符を打つことができる」と言い、周恩来の路線にもどった。鄧小平のこの決断によって中ロの国境問題は最終的な解決に向かった（この発言は中国が公式に発表している鄧小平演説集に収録されている）。

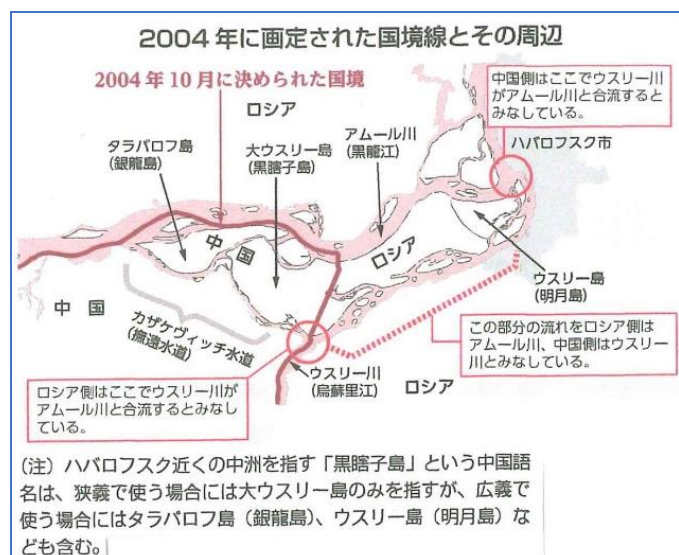
1990 年 4 月、中ソは「国境地帯の相互兵力削減および軍事分野の信頼醸成に関する原則協定」を締結。91 年 5 月に江沢民が訪ソして「中ソ東部国境協定」に署名した。91 年 12 月にソ連が解体したので、これはソ連と中華人民共和国が署名した最初で最後の国境協定となった。国境河川＝アムール川とウスリー川の中洲の島々のうち大きな 2 つの島（黒瞎子島＝タラバロフ島と大ウスリー島）だけが問題として残ったが、それ以外はすべて合意が成立した。

1994 年 9 月にはエリツィン大統領と江沢民主席の間で、「中ロ西部国境協定」が署名された。ソ連解体後なので、西部国境はわずか 54km のみだが、それ以外にも中央アジアのカザフスタン、キルギスタン、タジキスタンの 3 国と中国は国境を接しており、この 3 か国に中国とロシアを加えて 5 カ国で「国境地区の軍事分野の信頼醸成措置協定」（96 年 4 月）および「国境地区の軍事力相互削減協定」（97 年 4 月）が締結され、国境地帯の緊張緩和が進んだ。

国境交渉第四段階（2001 年～04 年）

2000 年にプーチン大統領が就任して、江沢民、胡錦濤と国境問題に取り組んだ（中ロ国境交渉第 4 段階、2001～04 年）。ロシア側は当初、タラバロフ島も大ウスリー島も全てロシア領だという立場だったが、01 年 11 月モスクワの交渉でタラバロフ島を中国に譲ると提案した。最終的にはロシアがさらに譲歩し、タラバロフ島と大ウスリー島を合計した面積を中ロで折半する形で妥結し、「中ロ東部国境補充協定」が調印された（2004 年 10 月）。大ウスリー島の西部分とタラバロフ島を中国領とし、大ウスリー島の東半分超をロシア領として、最終的な境界標識の設置作業が終わったのは 2008 年のことである。

黒瞎子島（ヘイシャーズ島）の問題がどうしても最後まで残ったか。北京条約（1860 年）では、アムール川とウスリー川の合流地点で、アムール川の北側とウスリー川の東側がロシア領、アムール川の南側とウスリー川の西側が中国領としている。しかし、アムール川とウスリー川の合流点がどこなのか明確ではなかった。黒瞎子島（タラバロフ島と大ウスリー島）の南を流れるカザケビッチ水道をロシア側はアムール



川だと主張して、この水道とウスリー川がぶつかる地点が合流点だという。中国側は、アムール川の本流は北側にあり、ウスリー川との合流点はハバロフスク市のそばだと主張する。合流点をどこにするかによって、タラバロフ島と大ウスリー島の所属が違ってくる。

さらに北京条約にはロシア側が作成した地図が付属しており、その地図の有効性をめぐっても中ロの見解は分かれていた。

この論争には中国側に分があるように思われるが、タラバロフ島と大ウスリー島をどちらも中国領としてしまうと、ハバロフスク市の川向うがすぐ中国領となり、ロシア側の防衛上の不安が大きくなる。結局、中国側も妥協して、半々で決着することになったようである。これは最初から半々＝フィフティ・フィフティの原則があったというわけではなく、さまざまな利害調整と交渉の結果、そうなったものと思われる。

外交交渉において、どちらかが一方的に勝利するということは考えられない。「どちらも敗者ではない」と見られない限り、交渉は妥結しないと言える。

交渉結果が意味するもの

1964年から2004年まで40年間の国境交渉の結果、中ロ国境のアムール川・ウスリー川・アルグン川の合計2444の中洲・島のうち、1163(886 km²)がソ連・ロシア領となり、1281(851 km²)が中国領となった。

ロシアは帝政ロシアが獲得した広大な領土を中国に認めさせた。一方、中国は失った広大な領土の「失地回復」要求を放棄し、ロシアとの安定的な関係を築くことを選択した。

ロシア側の受け止め方としては、中国に妥協しすぎだという反対論もあったが、コサチョフという議会の国際問題委員長が、東部国境補充協定の批准審議で、次のように言っているのが注目される。「中国とロシアの経済成長、軍事力増大の速度には明らかに開きがあることを考えれば、(この問題を先送りすれば)ロシアではなく中国を利することになる。領土

問題には常に緊張激化のリスク、軍事紛争のリスクが潜んでいる。本協定の批准により、われわれは国境紛争に終止符を打ち、ロシアの安全保障を確保できる」。これは中国の国力がロシアを上回っていることを認めた上で、係争問題を早く解決しようという、非常に正直な発言である。

ロシアと中国、今後の関係

米国一強の現在の国際体制に対して、中国とロシアは多極化を唱えている。冷戦終結(89年12月)・ソ連解体(91年12月)の後、米国が押し進めた各国での民主化体制変革、カラー革命、和平演変に、中ロ両国はともに警戒し、反発しており、戦略的な相互協力関係を築いている。ウクライナ戦争が始まってからは、ロシアにとって中国は頼りになる大きな存在となっている。

中ロの違いとしては、ゴルバチョフ以降、ロシアでの政治改革、民主化と自由化に中国は警戒した時期があった。中国はグローバリゼーションで大きな利益を得ているが、ロシアはさほどでもない。

ロシア側にも中国への過度な依存は避けたい気持ちがあるが、ウクライナ戦争下の資源輸出などで、その依存は強まっている。プーチン大統領は最近、中国との同盟関係を志向するとの発言をしているが、中国は正式な同盟関係には慎重な姿勢を取っている。中国とロシアはお互いに助け合う関係にありながらも、微妙に異なる思惑を持った関係であると言える。

冷戦終結後のロシアでは、西欧民主主義・自由主義を信奉しヨーロッパの一員になろうという考え方と、リアリズムと多極化を掲げるユーラシア主義の考え方の両方があったが、プーチン体制の強化とともに西欧主義が低調になり、ロシア独自のアイデンティティを追求するユーラシア主義が強まっている。

中国では、外交において難しい問題は棚上げにして現状維持をする鄧小平の路線が長らく基本方針だった。そのおかげで中ロ国境交渉は妥結したし、中国は日本との尖閣問題、インドとの国境紛争や南シナ海の領有権問題でも、問題を棚上げにしてきた。しかし、習近平時代になって、この路線は大きく変更されたように見える。

今後、日本の対ロ外交、対中外交は、過去の外交交渉を踏まえ、最近の戦略的な情勢変化を考慮に入れつつ、検討していかなければならない。

(図は、当日の資料「中国とソ連・ロシアの国境交渉を振り返る」グローバル経営2013年4月号より転載させていただきました)

※本稿は、当日のメモおよび講演資料をもとに文章化したものです。文責はすべて編集部にあります。

昨年 7 月 8 日、東京で面白い講演会がありました。＜『スラヴ民族一分裂と紛争』～ウクライナ戦争の歴史的背景を深掘りする＞と題した石郷岡建氏の講演で、主催したのは故江田五月氏が会長をされていた日ロクラブという団体です。

ユーラシア大陸に初期インド・ヨーロッパ語族が現れた紀元前 6000 年頃から始まって、ユーラシアを東西に席卷する騎馬遊牧民族に度々翻弄されながら、ヨーロッパとスラヴの諸民族がそれぞれの国家を形成し、第一次大戦から第二次大戦を経て現在に至るまでの歴史の流れを、大胆に一気に語る内容で、とても勉強になりました。同じスラヴ民族であるロシアとウクライナが戦争にまで踏み込んだ歴史背景を読み解く参考資料として有益です。

編集に少し時間がかかりましたが講演録にまとめ、石郷岡氏の校閲と了解を得て、本誌に掲載させていただくことにしました。(編集部)

講演録

『スラヴ民族一分裂と紛争』

～ウクライナ戦争の歴史的背景を深掘りする

石郷岡 建 (元毎日新聞社モスクワ支局長)

あまり知られていませんが、スラヴ民族というのはヨーロッパで一番大きな民族です。ヨーロッパというとほとんどの人は西欧をイメージするのですが、西欧だけがヨーロッパではありません。東欧を含めたヨーロッパ全体を見た場合、スラヴ民族が一番大きな民族であるということです。ヨーロッパ地図を見るとよく分かります。ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、旧ユーゴスラヴィア、ブルガリアがスラヴ民族の国で、あとは非スラヴ民族です。東欧のほとんどはスラヴ民族ですね。

本日は、ウクライナ戦争の歴史的背景を理解する一助として、ヨーロッパとスラヴ民族の歴史についてお話しします。大学で 12 回に分けて行った講義を一度に全部話すのは無理なので、かなり端折った話になります。途中で終わればそこまでということでご了解ください。

南北に分かれるユーラシア大陸の地形

ユーラシア大陸全体の地形図を見ると、インド亜大陸が南からユーラシア大陸に衝突し、地形を盛り上げ、ヒマラヤ山脈やそれに連なるカラコルム、ヒンドークシといった山脈系が形成されました。ユーラシア大陸の北と南が、この長い山脈の壁によって分断され、南北の交流がさえぎられたのです。

インドは亜熱帯気候ですが、南の暖かい湿った風が高い山脈にさえぎられ、山の向こう側は乾燥地帯・砂漠となっています。ヒマラヤ山脈系の北側は砂漠地帯で、その先は草原地帯、森林地帯と続き、最後は凍土（土壌が半永久的に凍結したツンドラ地帯）が広がっています。大陸の気候は、南から熱帯・亜熱帯気候→山岳気候→乾燥気候→温暖草原気候→寒冷気候→極寒気候と変わることになります。

さまざまな人々が住むユーラシア大陸

砂漠、草原、森林、凍土ということでは何が言えるかというと、国というのは、普通は砂漠の国とか草原の国、森林の国という風に分かれていることが多いのですが、ロシアに関しては全部の気候・土壌形態が、一つの国の中に存在するということになります。

基本的には、東西に伸びる地形体系、つまり、砂漠だとか草原だとかが横に広がり、同じ生活共同体の人が住んでいることが多いです。しかし、南北の縦の線でみると、異なる気候・土壌に違う人々が住んでいて、砂漠に住む人と森林で暮



らす人とは全然違うということになります。南北の縦線に同じ共同体は作りにくいということになります。砂漠には羊やラクダを連れて歩く遊牧民が住んでいます。草原にも遊牧民はいますが、だんだん牛とか豚が出てきて、農耕民が増えていく。森林には狩猟民がいて、さらに遠く北へいくとトナカイの遊牧民がいたりします。

このような生活体系が全部あるということは、どういうことかという、域内にさまざまな部族共同体、民族共同体があって、これらの軋轢と対立がいろいろ問題を引き起こすということになります。砂漠・草原の遊牧民族と草原・森林の農耕民族では生き方が違います。生活だけでなく、気質や家族意識、世界観も違うわけです。これを一つに纏めなければいけないというのが、実は大きな問題になってくる。スラヴ民族、とくに東スラヴの近代化では、この問題が常につきまといました。

東西を行き来した人々と文化

ちなみに、ユーラシアの東西の流れは、人々の交流が容易になるということで、特に、動きやすいのは砂漠と草原ですね。森林は移動が困難です。

ということで、ユーラシア大陸で人々の大きな動きは、砂漠と平原にあった。つまり、遊牧民族が大きな力を持っていたということです。

ユーラシア大陸の東西関係を見ると、いろいろなものが流れています。わかりやすいのは食べ物（料理）です。餃子は中国の代表的な食べ物の一つですが、ユーラシア各地に同じような料理があります。モンゴルではボーズやホーショール、ロシアにくるとペリメニ。ペリメニの中に詰める肉は、凍土や森林地帯では熊とかトナカイですが、草原になると牛や豚になる。砂漠地帯では羊肉です。カザフスタンやトルコにも餃子と同じような料理があります。ウクライナではヴァーレニキ、イタリアにもラビオリという餃子型の料理があります。私は、この状況を、ユーラシア大陸の東西に広がった「餃子文化圏」と話すようにしています。

同様に、チャーハン（焼き飯）もそうですね。ただ、いったん炊いたご飯から作らずに、生米から作っていく料理の方が一般的です。これも中国からイタリア、スペインまで全部ある。ロシアや中央アジアではプロフ、イタリアに行くとピラフ、スペインではパエリアです。

このように、シルクロード以前からユーラシアの砂漠・平原では、人々が移動し、東西にさまざまな文化や食事、技術情報が流れていました。

ヨーロッパも南北が分かれる～地中海文明と蛮族地域

ユーラシア大陸の西端にある欧州も、ピレネー、アルプス、カルパチアの三つの山脈を境に南北に分かれています。三つの山脈は、古くはローマ帝国（地中海文明）とその北に



あるバーバリアン（蛮族地域）との境界線でした。これら山脈の北および東には、北ドイツ平原、ポーランド平原、ウクライナ平原、ルーマニア平原があり、この平原にアジア系の遊牧騎馬民族集団が東から押し寄せ、ローマ帝国の辺境を脅かしたわけです。これらの人々は遊牧民族が多かったのですが、平原の北の方には森林地帯もあり、地域によっては農耕民族や狩猟・採取民族などが住んでいました。

東欧地域をもう少し詳しく見ると、ウクライナ平原の西にカルパチア山脈が北西方向に向かって延びています。その南にルーマニア平原があって、さらに、西へ山岳地帯を越えるとハンガリー盆地です。その南のユーゴスラヴィアは山岳地帯です。このハンガリー平原に入ってきてローマ帝国の崩壊を呼び起こした騎馬遊牧民族がフン族で、ハンガリーはフン族の末裔たちの国でした。欧州のアジア系民族ともいえます。

ちなみに、フィンランドとエストニアも、アジアを源にする民族とされます。フィン・ウーゴル民族です。もっとも、これらアジア系を祖先とする民族は、長い歴史の中で欧州民族と交じり合い、アジア系とは言えない容貌の人たちになっています。

スラヴ族

ウクライナ平原からポーランド平原に住んでいたスラヴ族は、この遊牧民族の欧州への移動騒ぎに巻き込まれ、分裂や統合を繰り返しました。時代が下ると、ドイツ平原から東へ侵入するゲルマン民族にも翻弄されます。現在、スラヴ民族は、カルパチア山脈の北（ポーランド、チェコ、スロヴァキア）、東（ロシア、ベラルーシ、ウクライナ）、南（旧ユーゴ諸国、ブルガリア）に分断され、分散して生活しています。

では、スラヴ民族はどこから生まれ出てきたのか。古代文明の一つ、チグリス、ユーフラテス川の上流に出現した初期インド・ヨーロッパ語族が北のコーカサス山脈を越えてユー

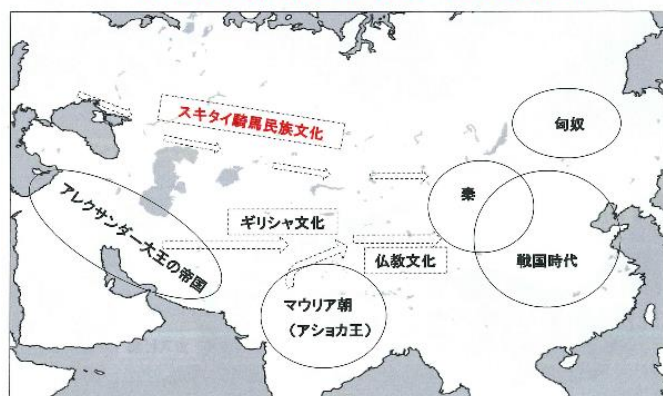


ロシアの草原に移動してきたのが紀元前 6000 年頃と言われています。このインド・ヨーロッパ語族から、ゲルマン、スラヴ、バルト、それからケルトなどさまざまな欧州語族の祖先が生まれ、西のヨーロッパへと向かいます（紀元前 3000 年頃）。同時に、東の中央アジアを徘徊した民族もいました。インド、イラン、クルドといった現在のインドや中東地域に住む人たちで、彼らも同じインド・ヨーロッパ語族です。

最初の騎馬民族スキタイ族

紀元前 1600 年頃、コーカサス山脈の南のアナトリア地方にヒッタイトという民族が現れます。古くから鉄器を使いこなした民族とされています。ヒッタイトに近い民族で、古代東イラン系騎馬民族がスキタイです。ロシア南部からウクライナの黒海沿岸地帯に現れて繁栄したのが、紀元前 600 年頃から紀元後 200 年頃です。スキタイに追われ、スラヴ系の人たちは遊牧民から距離をとって北へ北へと逃れて行くことになります。

ユーラシアの歴史（紀元前 4～3 世紀） —文化(文明)は、西から東へと移動した。



スキタイ族は馬を使って、自由自在に草原地帯を駆け巡りました。馬を使うことから行動半径が広がり、スキタイ騎馬民族の文化は「草原の道」を経て、遠くモンゴルやシベリア、中国北部にも及び、各地にその痕跡を残しています。スキタイが活躍した紀元前 4～3 世紀には、西の地中海でギリシア都市国家群が栄え、ローマ帝国が勃興します。東の中国では

匈奴が現れ、秦の始皇帝が中華統一を果たします。アレクサンダー大王の大遠征（紀元前 334 年～323 年）でギリシア文化がインド北部に及び、その後インドの仏教文化が中国に伝わり、西から東へと様々な流れがあったのです。この時期、古代文化（文明）は西から東へと向かって動いていたとなります。

ユーラシアの民族大移動の始まり（紀元 1～2 世紀）

ユーラシアの民族大移動は何回もありますが、スキタイ族の東への移動時代後は、ほとんど東から西への逆の流れになります。つまり、アジアから欧州への流れです。

秦の時代に匈奴が中国北方を脅かしましたが、その後、南北に分裂して勢力が衰えていきました。その隙をぬって中国

ユーラシアの動き（紀元 2～1 世紀）

遊牧騎馬民族(アルタイ語族)は、東から西へと大移動した。



東北部で鮮卑が力をつけます。鮮卑の圧迫で、その西にいた北匈奴がさらに西へ移動する。北匈奴に押されて、フン族がカスピ海の北から黒海の方へ移動する。フン族の移動で、黒海の北にいたゴート族がローマ帝国へ近づいていきました。

ゴート族は古代ゲルマン系民族で、ドイツ平原から南下し、紀元 50 年頃には黒海沿岸に住んでいました。そのゴート族の侵入がローマ帝国の衰退につながります。ゴート族の移動は欧州の民族大移動を引き起こす結果になったとされます。このような「玉突き現象」が歴史上何回も起こりました。

キリスト教文化圏と西欧概念の形成

キリスト教はユダヤ教から生まれたわけですが、当初はローマ帝国に弾圧されたものの、やがてローマ帝国の国教となって発展していきます。アルプス山脈、ピレネー山脈を越えて、バーバリアン（蛮族地域）、つまり現在のフランスやドイツ、スペイン、ドイツ、イギリスにも流れ、キリスト教文化を広めました。しかし、東のカルパチア山脈から北側、ドイツ、ポーランド、ウクライナ、バルトについては、紀元 2 世紀の時点では、まだキリスト教文化圏ではありませんでした。このキリスト教文化圏の拡大が西欧という概念の形成に大きく関わっていきます。キリスト教文化であるかないかということが、歴史上いろんな場面で大きな問題を作ることになり

ます。

ユーラシアの民族大移動第二波～フン族の欧州襲来

ユーラシア民族移動の第二波は、紀元 3 世紀から 6 世紀にかけて起こります。中国北部に柔然が勃興し、それに押されて高車という民族（現在のウイグル人の祖先とも言われています）が西に逃れ、これがエフタル族（中央アジア）→アラン族（カスピ海北東）→フン族（黒海北岸）との玉突きを起こす。

ユーラシアの歴史（紀元 3～6 世紀）

東から西へ、民族の大移動（その 2、**フン族の欧州襲来**）。



さらに、フン族に追われて、ゴート族がまずローマ帝国に入り、さらにフン族も侵入する。ゴート族とフン族の襲来がローマ帝国の衰退と解体を、決定的にもたらしたとされます。

フン族を描いた絵があります。おそらく想像図ですが、明らかにアジア人の侵入で、ヨーロッパにとっては非常に恐ろしい出来事だったわけです。

ただし、遊牧民族というのは大きな人口の共同体を作らないという特徴があります。羊などの餌は主に、草原地帯にあり、餌がなくなると、別の場所に移動するという彼らの生活です。人口密集地域になると、餌の中心である草原の奪い合いになり、移動するのも大変です。遊牧生活を守るためには、小集団の方が動きやすい。そもそも、遊牧民は水が少ない、乾燥地帯に住んでおり、水の補給の観点からも大きな共同体は作れないとなります。

このため、フン族は、ヨーロッパ遠征のために、征服した地域の人々を自分の軍隊に引き入れ、連れて行くという軍組織を作りました。フン族は、トングース、朝鮮、チベット、イラン族を引き連れ、374 年にヴォルガ川を渡り、欧州へ進出したとされます。さらに、スラヴ、フィン・ウゴールなどの各部族を支配下に置き、ゴート族と衝突し、ハンガリー平原に入ってフン帝国を築きました。5 世紀前半にアッティラという指導者が現れて最盛期を迎えます。アッティラの母親はヴォルガ川地域出身と言われているので、もしかしたらスラヴ族だったかもしれません。フン帝国は、東ヨーロッパからウクライナ、ロシア南部、中央アジアにまたがる広大な地



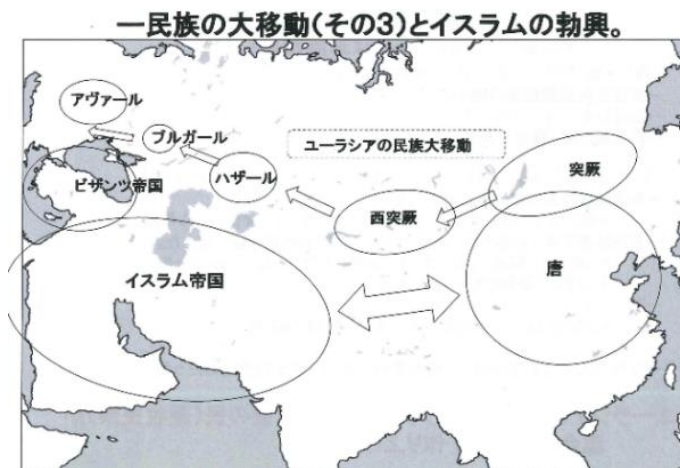
「アラン族と戦うフン族」ヨハン・ネポムク・ガイガー画(1873 年)

域を支配したのですが、アッティラの死後、内紛により瓦解しました。

ユーラシアの民族大移動第三波（紀元 7 世紀）

次の民族大移動は紀元 7 世紀に起こります。6 世紀の半ば中国北部に、今度は突厥という民族が出てきます。この民族も、現在のウイグル人と同じ血が流れていると言われています。隋・唐による中華統一の少し前です。突厥は 6 世紀末に東西に分裂し、西突厥が西へ移動、西突厥→ハザール族→ブルガル族→アヴァール族と玉突きを起こします。

ユーラシアの歴史（紀元 7 世紀）



この民族大移動で、アヴァール族は、フン族のあとに、ハンガリーへ進出します。この玉突きの中に出てくるブルガル族は中央アジア系の遊牧民族です。のちに、西へと移動し、バルカン半島を南下し、南スラブ族と混合し、ブルガリアという国を作ることになりました。つまり、今のブルガリア人は、民族的には南スラブ民族と分類されますが、その源をたどると、ボルガ川の上流から出てきた人々の血も流れている、となるかもしれません。

カスピ海の北にはハザール族というあまりよく分かっていない不思議な人たちもいました。ユダヤ人ではないのに、ユダヤ教を国教にした人たちです。

スラヴの昔話では、ユーラシア地域の人々が宗教を受容する時には、3 つの宗教から選択するという問題が常にあり、その中からどれを選ぶか悩んだ、という話が多くあります。その三つの宗教というのは、イスラム教とキリスト教とユダヤ教ということが多いです。ハザール族はユダヤ教を選んだというわけです。

ちなみに、ロシアは東ローマ帝国（のちのビザンツ帝国）のキリスト教（東方正教）を選びました。ただし、ロシアの三つの宗教の選択は、東方正教、カトリック教、イスラム教だったという話になっています。

昔話の中で、三つという数字があまりにも、あちこちに出てくる背景には、キリスト教の「三位一体」の教えの影響があったのではないかと、私は思っています。

ハザールの話に戻ると、コーカサス（カフカス）地方の東側には、山岳ユダヤ民族という人たちがいました。この人たちが、ハザールの祖先ではないかとも言われているのですが、はっきりしません。

総括すると、東方遊牧民族が大移動を繰り返す中で、ユーラシア大陸の広大な草原地帯と森林地帯には、フン族、アヴァール族、ブルガール族、スラヴ族、バルト族、フィン・ウゴル族といったさまざまな部族というか、一つの民族を形成する以前の前段階の集団が形成され、衝突し、混じり合っていたということになります。

ユーラシアの歴史～森と草原の戦い

ユーラシアの歴史を、別の面から見ると、森と草原の戦いなんですね。ユーラシア大陸の東西を走る高い山脈の北側には砂漠地帯があり、さらに北へ上がると、広大な草原地帯と森林地帯が東西に連続しています。森と草原の戦いを整理して言うと、次のようなことが言えるかもしれません。

①森は湿潤気候で、森の中の移動は困難が伴うため、定住農耕民族の地となった。森は勤勉で保守的な農民気質を育てた。しかし、森は長い間、歴史と発展から取り残されていた。

②一方、草原は乾燥気候で、障害物のない土地が広がり、人々の発展の場だった。モンゴル、中央アジア、南ロシア、ウクライナ、マジャール平原といった草原地帯を、馬と武器を巧みに操った人々が駆け巡った。遊牧騎馬民族にはスキタイ、匈奴、フン、ゴート、突厥、アヴァール、ブルガール、モンゴル、タタール、ジューンガルなど、

非常に沢山の集団がいました。草原は危険ではあるが、人々をつなぐ技術・文化交流の場でもあったのです。

それは、「シルクロード」であり、「毛皮ロード」であり、「餃子・饅頭・麺の道」でもありました。草原は自由で、独立心にあふれ、戦闘的で気ままな気質を育てました。草原の人々は移動を好み、技術革新に富み、発展の場だったのです。

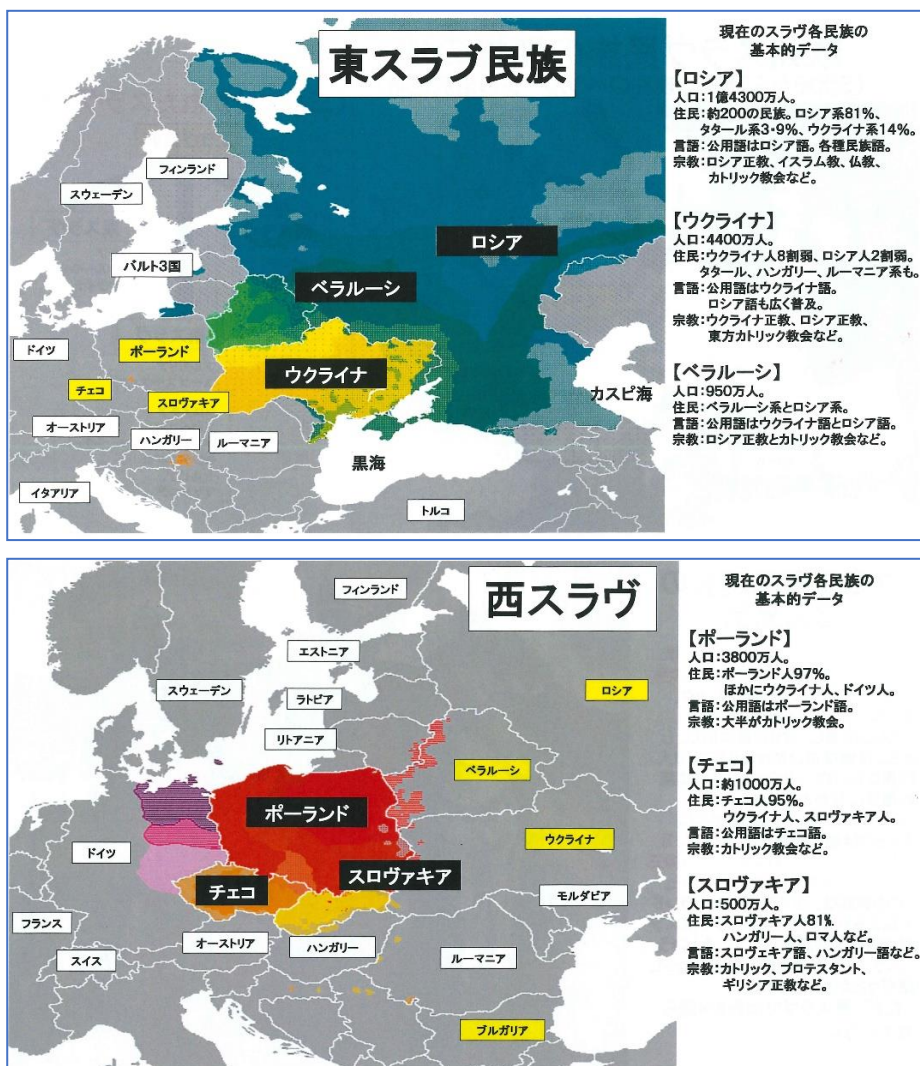
近代以降は、「遊牧民」というと、定住せずに移動を繰り返す、乱暴で無秩序な人たちと思われがちです。しかし、実際は全く違っていただけです。ただ、森の民と草原の民がはっきりと分かれていたわけではなく、その境界線は非常に曖昧だったとも言えます。ユーラシアは「森の民」と「草原の民」が混合して歴史を作り上げたとも言えます。

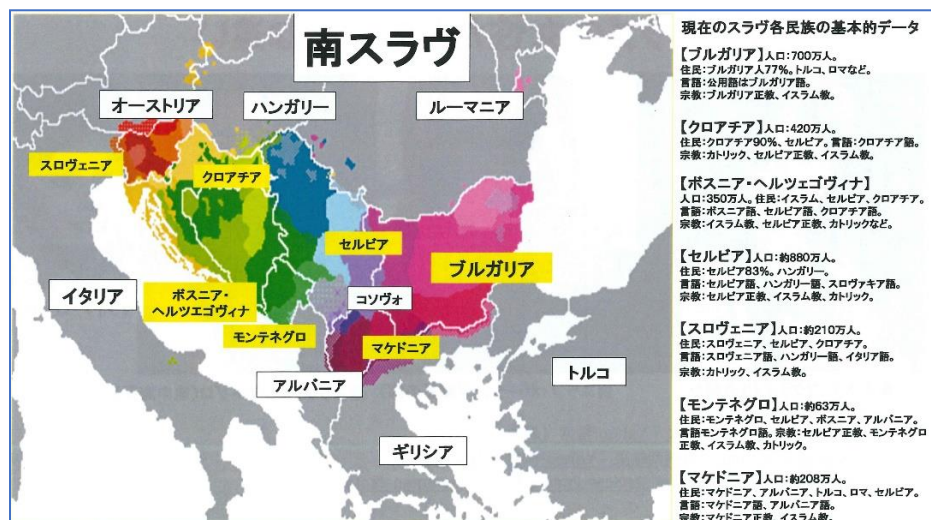
つまり、スラヴ系を含めた欧州諸民族は、農耕系の保守的な農民気質の人たちと、危険ではあるけれど自由で独立心に溢れた遊牧系の人たちの二つが交わった共同体で、単純には割り切れない多彩な顔を持った人々がいたということになります。

古代スラヴ民族

それではいよいよ本題。欧州スラヴ民族の話に移ります。

《資料》現在のスラヴ民族の基本データ／地図と数字





スラヴ族は、その昔コーカサス山脈を越えてきた初期インド・ヨーロッパ語族の中から派生したわけですが、コーカサスから北西に移動して、5世紀から7世紀にかけて、黒海とバルト海の間、現在のベラルーシの沼沢地帯に古代スラヴ族が集住するようになります。ここは草原と森林の間ですね。つまり、農耕をしつつ、遊牧騎馬民族が侵入してきたときは森に逃げ込むわけです。

東の中央アジアなどから、フン族、アヴァール族、ブルガール族など遊牧騎馬民族が絶え間なく襲来してきました。西からはゲルマン族がやって来る。その度にあちこちへ逃げるわけですが、その結果、スラヴ族は、西スラヴ、東スラヴ、南スラヴの3つに分かれ、やがて別々の道を歩むことになります。

スラヴ国家建設3人兄弟神話

スラヴの国家建設についての神話があります。

その昔、スラヴ民族の先祖にあたるパンノニヤという女性から3人の男の子が生まれました。名前は、レック、ルーシ、チェックと名づけられた。3人は成長し、狩りの旅に出た。しかし、獲物を追いかけるうちに、3人はそれぞれ異なる方向へと向かい、離れ離れに分かれてしまった。レックは北、ルーシは東、チェックは西に向かった。そして、レックはポーランド、ルーシはロシア、チェックはチェコの三つのスラヴ国家の創始者となった、という話です。

この神話は西スラヴのポーランドで伝えられているものですが、南スラヴでも同様の話が別の組み合わせであるそうです。おそらくスラヴ3民族の団結と結束を願った話だったのではないかと思います。ただ、この3兄弟という話は、なぜか東スラヴではあまり語られていません。

スラヴの女性たちの微妙な違い

東、西、南の3つのスラヴはどう違うのか。女性の顔で比較を試みると、東スラヴは丸顔の人が多い。西スラヴは細長

の顔です。南スラヴになると地中海系というか目鼻立ちのくっきりした顔で、その代表は女優のソフィア・ローレンです。日本人は、東スラヴの人を見ると可愛いと感じるようですが、ソフィア・ローレンはどうだと言うと、ちょっとバタ臭く、あまり、近づけないという感じではないか思います。しかし、ヨーロッパでは美人の典型は丸顔ではなくて、ソフィア・ローレンですね。だから日本人は丸顔のロシア人を好ましく思うかもしれませんが、ロシアの人たちは南の地中海系の顔を非常に羨ましく思っているようです。



ソフィア・ローレン

東スラヴとヴァリャーグ（ノルマン系ヴァイキング族）

スラヴ民族の成り立ちにもどります。歴史的には、人々はある種の集団を作って生きてきました。まず最初は家族関係の集団を作る。それが大きくなって部族になって、いくつかの部族が部族集団を作り、さらに部族集団連合を作る……、というような形で発展していきました。このような部族集団としてスラヴ民族の人々は、黒海とバルト海の間、東ヨーロッパ平原とポーランド平原、南のバルカン半島など、あちこちに分散しました。

9世紀ごろにはスロヴェネ人、クリウィチ人、ボロチャーネ人、ポーランド人、シレジア人、チェク人、モラビア人、クロアチア人、セルビア人、ブルガル人……、これら様々なスラヴの部族と人たちが広範囲に住んでいたとなります。そして、多数の部族集団が各地に形成されますが、まだ混沌としていて大きなまとまりにはならなかった。

「ヴァリャーグ」と「東スラヴ」の出会い



「リユーリクとその兄弟を出迎えるスラヴの人々」

ヴィクトル・ヴァスネツォフ画

そこにやって来たのがヴァリャーグというノルマン系の民族です。ヴァリャーグはスウェーデンのヴァイキング族だったとされます。彼らは北欧から南下し、現在のウクライナ南部平原を展開していた東方遊牧民族（ペチュネグ、ハザールなど）を抑えて、ドニエプル川を中心としたバルト海から黒海までの河川地域の交易ルートを築き上げました。

ヴァイキング族というのは海賊をしながら、商人もやっていた人たちです。ドニエプル川を伝って黒海に出たのは、当然その先にあるコンスタンチノープル、ビザンツ帝国（東ローマ帝国）との交易が目的でした。

キエフ・ルーシ (9 世紀～11 世紀)

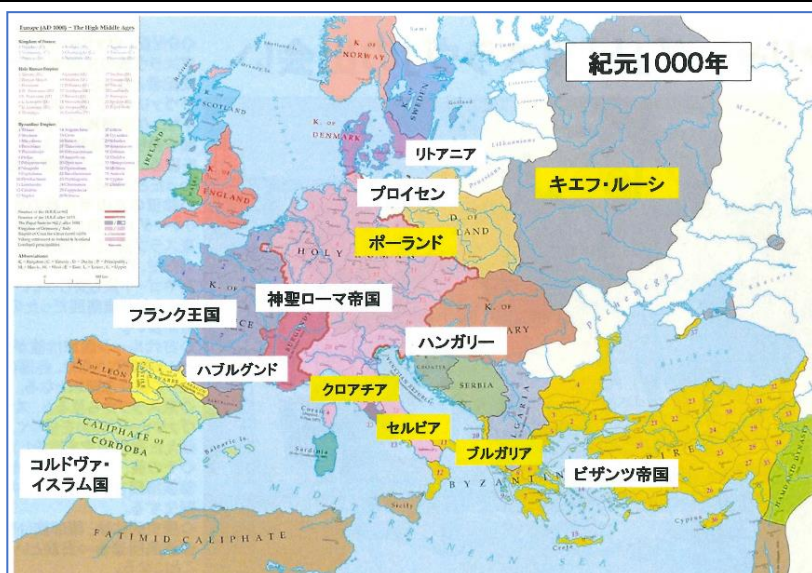
この時代、スラヴ人は部族集団から統合・統一への道を歩むことになります。そして、スラヴ部族連合・スラヴ民族へと発展することになります。数多くあるスラヴ族の中には、西スラヴ地域ではポーランド、チェコ、スロヴァキアが台頭し、南スラヴ地域ではクロアチア、スロヴェニア、セルビア、ブルガルなどがまとまっていきました。

ただし、東スラヴ地域では、ロシア、ウクライナ、ベラルーシの名前はまだ出しておらず混沌としていて、南下してきた強固な軍事力を持つノルマン（ヴァリャーグ）に従い、依存するしかなかったようです。ヴァリャーグの政治的支配下に入る時代、東スラヴ族は、単に「ルーシ」と呼ばれていました。

様々な「ルーシ」と呼ぶ部族集団が広範囲に沢山住んでいましたが、「ルーシ」という統一民族はいなかったということだと思います。現在のウクライナも、ロシアも、ベラルーシも、ガリツィアありませんでした。逆に、さまざまな部族集団の中には、今は消えてしまった「バルト・ルーシ」というような部族集団も存在していました。

東スラヴ地域では、「ルーシ」の部族集団が、様々にまとまっていくなかで、その中心になったのがキエフです。つまり、さまざまなルーシの中から「キエフ・ルーシ」という部族連合が統合されていく形をとったと思われます。

しかし、その後、騎馬民族のモンゴルなどの進出で、「キエフ・ルーシ」が没落していき、「キエフ・ルーシ」は歴史から消えていきました。現在のウクライナは「キエフ・ルーシ」を中心として発展した地域の国になっていますが、「ルーシ」という名前は使っていません。代わりに、「ウクライナ」という名前を使っています。そして、ウクライナの意味は、「辺境」です。モスクワ公国から見た辺境とポーランドから見た辺境と、その言葉の起源は二つの説に分かれているようです。この説明に反発するウクライナの人はい多いです。「ウクライナ」という言葉の本当の意味は「辺境」ではないと、反論しています。



ヴァリャーグが東スラヴ地域に侵入した時、首長のリュリクは北のノヴゴロドを最初に征服しました。リュリク公の後を継いだオレグ公が、キエフへと南下し、キエフを本拠地とするとともに、東スラヴ諸族の大半を支配下に置きました。オレグ公の後、イーゴリ公、スヴャトスラフ公と続くのですが、「キエフ・ルーシ」を含む周辺地域へと大きく領土を広げ、「キエフ・ルーシ国家」、キエフ大公国を作り上げていきました。

つまり、ヴァリャーグの指導者たちによって東スラヴの諸部族はスラヴ部族連合へと統合され、キエフ大公国という国家を作り上げたということだったと思われます。

紀元 11 世紀、キエフ大公国はヨーロッパ東端の大国となっていく。一方、ルーシに進出したヴァリャーグ族は、スラヴ共同体に呑み込まれ、同化し、埋没し、歴史から消えていきます。

東方正教会の受容～988 年ウラジーミル大公の時代

キエフ大公国はウラジーミル大公の時代、988 年に東ローマ帝国（ビザンツ帝国）のキリスト教（東方正教）を国家宗教として取り入れます。昔話によれば、どの宗教を選ぶかということになり、スラヴ族はビザンツ帝国の壮大な教会建築を見て、東方正教会を受け入れたとされます。

ロシアの作曲家ヴォロディンは、スラヴ部族と遊牧民族ポロヴェッツ族の戦いを描いたオペラ「イーゴリ公」を作りました。このオペラの中で演じられる「ポロヴェッツの踊り」は、日本では「韃靼人の踊り」と呼ばれています。実際は韃靼人ではなく、ポロヴェッツ人だったのです。騎馬民族モンゴルが西へ進出した際、モンゴル族の戦いの先頭に立ったのが、韃靼部族だったためとされます。

さらに、モンゴルが中央アジアへ進出した際、中央アジアのチュルク系部族集団が、モンゴルの支配下に入ります。次はこのチュルク部族集団が、韃靼族に代わり、最前線に立ったとされます。のちに、タタールと呼ばれていた人たちです。

このタタールという呼称は、「韃靼」という言葉から来たともいわれています。

その後、ボルガ川東岸地域の中央アジアのチュルク系遊牧民族は、すべてタタールと呼ばれるようになります。スラヴ民族にとっては、モンゴル部族と接触・戦うことはあまりなく、中央アジア系遊牧民族のタタールとの接触が多く、東からきたのはモンゴル人ではなく、タタール人と戦っているとの意識の方が強かったということだったと思います。

モンゴル軍団が西洋に侵入し、生肉を食べていたことから、「タルタル料理」という言葉が生まれたとされます。そのタルタルという言葉は、タタール人からとったとも言われています。

時代が下ってロシアがモンゴルの支配下に置かれた時代は、「タタールのくびき」と呼ばれることになります。モンゴル・タタールがスラヴ民族を支配し、国家として発展が遅れたとの意味を含めています。

しかし、最近では、西欧歴史家の一方的解釈で、果たしてスラヴ民族が「くびき」という状態だったのか、モンゴルの支配下で苦しんだという説が正しいかどうか、疑問視されています。モンゴル帝国は、騎馬民族を使って、ユーラシア大陸を席卷し、様々な文化や技術、軍事手段を発展させていました。さらに、情報・通信網システム等も作っており、モンゴル帝国の方が明らかに国家発展が進んでいたという主張が出ています。

ロシアを含むスラヴ民族地域の軍事・経済・文化水準は、モンゴルに比べると、強力な軍事・その他技術を持っていない貧しい集団社会で、「モンゴルのくびき」で、ロシアの発展が遅れたという話は実態を表していないとの指摘です。特に、モンゴルでは、この主張が強いです。

南スラヴ世界の発展（10 世紀～14 世紀）

ではこの頃、南スラヴはどういう状況だったかと言うと、南スラヴ民族はバルカン半島へと南下して、バラバラに分かれます。なぜかという、山岳地帯が多いので、それほど大きな領域を占めることができなかったわけです。その中で一番大きな国を成したのはブルガリアです。ブルガリアに入ったのはブルガールという中央アジア系のタタール系部族連合集団ですが、南下してきたスラヴ族と混血して、ブルガリア民族を作り上げていきます。ブルガール族が南スラヴ族と合流してブルガリア王国を創設したのは 9 世紀のことでした。その後、ブルガリアはオスマン帝国の支配・影響下に入り、トルコ民族とも混合することになります。

バルカン半島では、10 世紀ごろにセルビア、クロアチアなどがまとまりを見せ台頭します。いわゆるユーゴスラヴィアですね。ユーゴスラヴィアの意味は、ユーゴ＝南なので、要

するに「南スラヴ」ということです。ただ、南スラヴ族は地理的な要因とともに、宗教も違ったりして、小さく分かれてしまいました。

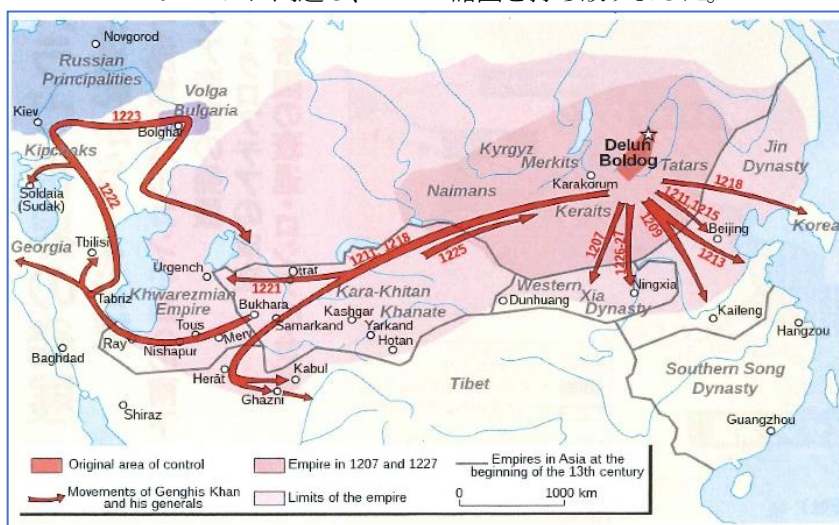
14 世紀になると中央アジアのオスマン族（チュルク民族）が南下し、ついにビザンツ帝国（東ローマ）が滅亡します（1453 年）。オスマン帝国の時代が始まり、以後、南スラヴ民族はトルコとの対立・隷属の時代に入ります。

モンゴル帝国のユーラシア大陸統一（紀元 13 世紀）

12 世紀末、北東モンゴルのキヤト族にテムジンという名の男の子が生まれました。テムジンは、モンゴルの各部族集団をまとめ、部族集団連合を結成して、モンゴル周辺部族を平定・支配し、1206 年オノン川上流で開かれたクリルタイ＝部族連合会議で、チンギス・ハンと名乗ります。

チンギス・ハンに率いられた蒙古騎馬軍団は、中国北西部の西夏（タンгут族）、東北部の金（女真族）を破り、さらに南の南宋（漢族）を平定して中国全土を支配下に置きました。

1218 年から 23 年にかけて、モンゴル軍は中央アジアへ遠征し、サマルカンド、ブハラなどを襲い、アフガニスタンにも侵攻します。さらにカスピ海の南を回り、コーカサスを経てロシアに到達し、ルーシ諸国を打ち破りました。



モンゴル軍の第二次欧州遠征

チンギス・ハンは 1227 年に遠征途中、病没しましたが、その権力は子や孫たちに分散され、欧州遠征を引き継いだのは長男ジョチの息子バトゥでした。

モンゴル軍は 1237 年～42 年に第二次欧州遠征を行い、ルーシ諸侯地域に侵入。二度にわたりキエフ大公国を攻撃し、徹底的に破壊しました。これによって東スラヴの中心だったキエフ・ルーシは没落し、モスクワ公国などの北の「ルーシ」に勢力が移っていきます。

キエフ公国の支配地だった南のウクライナ平原には、タタール系遊牧民の騎馬軍団が遊弋し、キエフ・ルーシ勢力は二

モンゴルの欧州来襲 (1223 年～1242 年)



度と立ち上がることができず、結果的にウクライナ・ルーシはロシア・ルーシの発展を超えることができませんでした。つまり、小ルーシ（ウクライナ）と大ルーシ（ロシア）との格差の構図が成立したのです。これが今日のウクライナ問題の根底にある話でもあります。

図は、モンゴル軍のヨーロッパ遠征の全体図です。キエフを襲う前にモスクワやノヴゴロドにも行き、キエフの後には、ポーランド、神聖ローマ帝国、ハンガリー、セルビア、ブルガリア等の国々も襲っています。

ただ、ポーランドのレグニッツというところでモンゴル軍は敗退します（1241 年）。欧州遠征は終わります。それでも地図の茶色の部分が遊牧騎馬民族の占領地域、薄黄色の部分がルーシ諸公国で、その後長く、モンゴルの支配をうけたことが分かります。

モンゴル軍は南部の草原地帯については東西交易ルートを押さえるため直接統治を行いました。農耕定住民が住む北部の征服地については、その地の首長（ルーシ諸侯）を通じて税の貢納と軍役を課す間接統治を行いました。また被支配地の宗教や文化についても寛容であったとされます。

モンゴル支配下の東スラヴでは、新しく出現したスラヴ部族連合の中で、後のロシアとベラルーシとなる国家が、次第に現れてくるのですが、ウクライナは南部平原のモンゴル系キプチャク・ハン国の圧力で国家として、まとまることがなかなかできなかったのです。

モンゴル支配は約 250 年間続きました。しかし、遊牧騎馬民族が非常に大きな力があつた時代は 15 世紀の末頃に終わります。ユーラシアの広大な地域を支配した後、モンゴル帝国が突如崩れていきます。何故なのかよく分からないのですが、私の想像では気候的な変動があつたのではないかと気がしています。

ドイツ・ゲルマン民族の東方拡大 (10 世紀～15 世紀)

このモンゴル軍の欧州来襲およびルーシ諸公国支配の時

期に一部重なる話なのですが、西からはドイツ・ゲルマン民族の東方拡大が始まります。

その頃、西スラヴでは、ヨーロッパを東西に分かつ境界線と言われたエルベ川の近くまでスラヴ族が住んでいたのですが、ドイツ民族がエルベ川から東のオーデル川へと東方植民を広げ、ここにゲルマン民族とスラヴ民族がぶつかることになります。

13 世紀から 14 世紀にかけて、ドイツ騎士団がバルト・スラヴ地域へと植民を拡大していきます。ドイツ騎士団（聖母マリア騎士修道会またはチュートン騎士団）です。カトリック教会組織で、聖地パレスチナへのキリスト教徒巡礼を護衛するために

1198 年に作られたとされます。途中からパレスチナに興味をなくし、「北方十字軍」と称して東方に進出、非キリスト教徒を制圧し、バルト海沿岸地域の支配を進めました。特にプロシア（古代プロイセン）では、住民の大虐殺を行ったと言われています。

ドイツ騎士団が建設または支配した東方移民都市には、クールラント地方（現ラトビア）、クライペダ（ドイツ名メーメル/現リトアニア）、カリニングラード（ドイツ名ケーニヒスベルク/現ロシア連邦）、グダンスク（ドイツ名ダンツィヒ/現ポーランド）、ズデーテン地方（現チェコ）などがあります。



タンネンベルクの戦い～ドイツ騎士団の敗退

欧州に襲来したモンゴル軍を、1241 年にレグニッツアの戦いで撃破したのは、ドイツ騎士団とポーランドの連合軍でした。その後、この地域ではリトアニアと東スラヴ系「ルテニア」の国家連合が成立、1236 年、リトアニア大公国が出現します。ドイツ騎士団と対立し、絶え間なく戦いが続きました。

1410 年 7 月、ドイツ騎士団とポーランド・リトアニア連

合軍が激突し、ドイツ騎士団が敗北しました。この戦いは、ドイツ語では「タンネンベルクの戦い」、ポーランド語では「グレンヴァルトの戦い」、リトアニア語では「ジャルギリスの戦い」と呼ばれています。

ゲルマン系ドイツ民族とスラヴ・バルト民族の東西対立だったわけですが、この戦いで、スラヴ・バルト民族の優勢が決まり、ドイツ民族のポーランド・バルト地域への拡大が止まります。

しかし、ドイツの東方拡大により、バルト地域でのカトリック教会の地位が固まり、西スラヴはカトリックもしくはプロテスタント地域になります。東スラヴは東方正教会地域にとどまるという宗教的分裂・対立が始まることになります。

なお、タンネンベルクの戦いですが、第一次大戦中の 1914 年 8 月にもドイツ軍とロシア軍がタンネンベルク近郊で衝突し、ロシア軍が大敗しました。この戦いは、ソルジェニーツィンの「1914 年夏」という作品に詳しく書かれています。

リトアニア大公国の拡大 (1240 年～1462 年)

東スラヴの諸公国はモンゴルの襲来で大きな被害を受け、長らくその支配下に置かれました。ルーシ諸公国でモンゴルの支配下に入らなかったのは北のノヴゴロドだけでした。

一方、モンゴルを敗退させ、ドイツ騎士団を撃破したリトアニア大公国は大きく発展して、次第に南へと支配地域を広げ、キエフ公国地域を翼下におさめます。その支配はポーランドとリトアニアの同君連合誕生(1386 年)後も続きました。北東部のロシアはモスクワ公国、ノヴゴロド公国などが国を守りましたが、ベラルーシ、ウクライナはリトアニア大公国に呑み込まれて、国を失う形となります。

ユーラシアの歴史 (紀元 15 世紀)

ーロシアとオスマン(帝国)の登場



さて、紀元 15 世紀のユーラシア全体はどうなっていたかというと、東の中国ではモンゴル帝国の一部であった「元」が倒れ、漢民族の「明王朝」(1368 年～1644 年)が成立します。中国の北にはチュルク系民族やオイラートといった遊牧民族が残っていて、西アジアにはティムール帝国(1370 年～1507 年)がありました。黒海から中東・地中海地域にはオス

マン族が中央アジアから南下し、アジア・アフリカ・ヨーロッパにまたがるオスマン・イスラム帝国(1299 年～1922 年)を築きます。

ロシアの西方進出 (1640 年～1667 年)

スラヴ地域では、1380 年にクリコヴォの戦いでモンゴル系のキプチャク・ハン国に勝利したモスクワ公国が急速に力をつけ、モンゴルの支配から脱していきます。最終的にロシアはモンゴルへの貢納をやめます。1480 年、イワン 3 世がツァーリの称号を使い、モスクワ大公国が自立しました。モスクワ大公国を中心とするロシアは、西のリトアニア・ポーランド連合と南のオスマン帝国と対峙していくことになります。

リトアニアはポーランドとの連合関係へと動きます。そして、次第にポーランドとの同質性を強め、ポーランド化していきます。東のロシアは西部へと進出し、ポーランド・リトアニア連合に圧力をかけ始めます。

一方、ウクライナとベラルーシの両民族はリトアニア・ポーランドの支配下にありました。1648 年にザポロージェ地域で、コサック集団の指導者フメリニツキーが反乱を起こします。クリミア・ハン国のタタール人と連合を組んで、現在のウクライナ西部へと進軍し、この地からポーランドとリトアニアを追い出し、抑圧を解放したとされます。

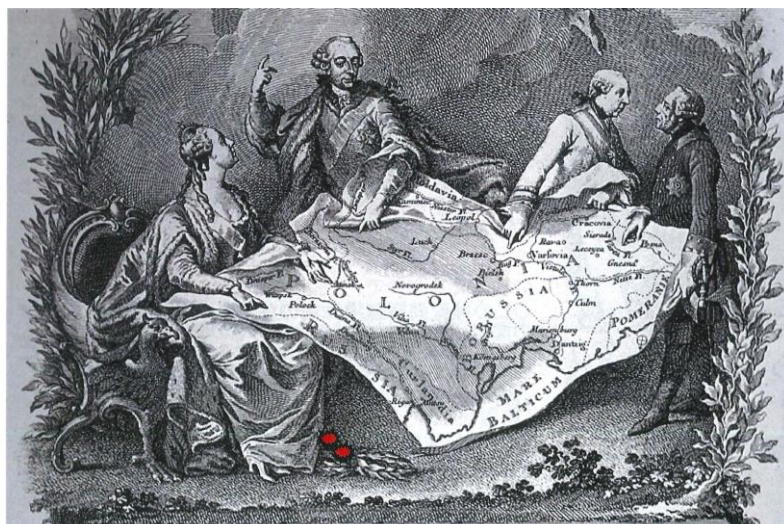
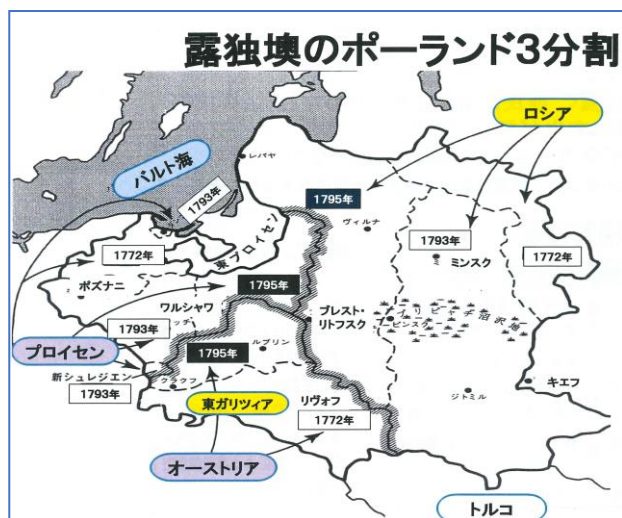
フメリニツキーはウクライナ民族再興の英雄とされているのですが、一方でロシアの支援を受けてその保護下に入っていたので、現在のウクライナでは評価が分かれているところです。また、反乱の際、フメリニツキーはユダヤ人の大虐殺を行ったことでも有名です。

ロシアは、フメリニツキーの反乱の前からリトアニア・ポーランドとの戦争を繰り返し、モスクワに攻め込まれたこともありましたが、やがて力をつけ、東スラヴの旧キエフ大公国の領土を奪っていきます。1667 年、ポーランド・リトアニア連合は、ドニエプル川東岸地域をロシアに引き渡し、急速に力を失っていきました。

この後、ロシアではピョートル大帝が欧化政策を推し進めて国力をつけ、北のバルト海に進出、さらに黒海・クリミア方面への南下圧力を強めます。同時に、ロシアは 16 世紀末から 19 世紀にかけてシベリアを東進し、ベーリング海からアラスカに至る世界最大の領土を持つ帝国を築いていくことになります。

独露墺のポーランド 3 分割 (1772 年～1795 年)

西スラヴ地域に目をもどすと、フメリニツキーの乱に乗じて北のスウェーデンが介入し、ポーランドに侵入します。このため、ポーランドはロシア・デンマークと同盟を結び、スウェーデンとの「北方戦争」(1648 年～1667 年)を戦いますが、国土が荒廃し、その後ますます力を失いました。18 世紀に入ると、ポーランドはロシアの影響下に置かれるよ



うになり、とくにエカテリーナ女帝はさまざまな内政干渉を行い、ポーランドの保護領化を進めました。この動きにオーストリアとプロイセン（ドイツ）が警戒感を持ち、結局、1772年に三国同意によるポーランドの第一次三分割が実施されます。さらに、1793年（第二次分割）、1795年（第三次分割）と続き、ポーランド国家は消滅することになります。

絵はそのカリカチュアですね。左から順にエカテリーナ 2 世（ロシア女帝）、フリードリッヒ 2 世（プロイセン王）、スタニスワフ 2 世（ポーランド国王）、ヨーゼフ 2 世（オーストリア皇帝）が、分割を討議している図と思われます。

東欧と西欧の違い

ここで少し話を変えて、東欧と西欧の違いを見ておきたいと思います。どうして東欧はこんなに国がまとまらないのかという話です。

東欧では、国がまとまらないために国民国家ができず、西欧的な近代市民社会が発達しなかったと言われています。東欧では絶対王政が確立しなかった。領主層が強く、農民が解放されなかった。農奴制が逆に発達した（再版農奴制）。さらに都市産業・文化が発達しなかったために、市民層が成熟せず、市民革命ができなかった。自由と民主主義を掲げる近代市民社会が十分に成熟しなかったとなります。

これに対して西欧では近代市民社会が発達した。その違いはなぜなのか。

紀元 1000 年の欧州地図（7 頁）をみると、西ローマ帝国の崩壊後、中世の西ヨーロッパはフランク王国、神聖ローマ帝国などに分かれています。

ここで、現在のフランスを中心とする西フランクで農業革命が起こります。いわゆる三圃制度の始まりです。三圃制度というのは農地を 3 つに分ける。1 つは小麦や大麦などの穀物、もう 1 つは家畜のえさなどをを作り、3 つめは休ませて放牧地にする。これを順番に回して地力を回復させるんですね。

さらに、牛や馬に引かせる鉄製鋤の改良で土地を深く耕

す農法が進みます。これによって農業が発達して、飢餓がなくなり、余剰農産物ができる。余った農産物を売る市場ができて、それはだいたい川沿いの港など物流に便利な場所に発達し、都市ができる。都市にはさまざまな職人や商人が集まってきて、商工業が発達し、都市文化が形成されます。

農村と都市文化の発達につれて、農村地帯を支配していた領主と騎士たちが没落し、都市の市民階級を基盤とする王権が強化され、やがて絶対君主制が始まります。絶対君主制のもとで国が一つにまとまって、王様を中心とする中央集権国家（主権国家）が出来上がる。絶対君主と都市市民階級が手を組んで、小領主や騎士たちを追い出していくわけですが、やがて今度は王様と都市市民階級が対立して近代市民革命が起こり、王政が倒れて自由・民主主義という近代国家ができたというふうに説明されています。

農業革命は東欧にも伝わったのですが、東欧地域の気候は西欧よりも寒く、余剰農産物がそれほど採れなかった。農民層が力を持つことができず、都市と商工業が発達せず、騎士や貴族階級が潰れなかった。逆に農奴制が強化されたわけです。つまり、東欧では王権の基盤を市民階級ではなく、地主貴族階級が担い続けることになりました。

これがよく分かるのは、ドイツのユンカー（Junker）ですね。ユンカーというのは、プロイセン貴族の通称で、東部ドイツ（エルベ川以東）の地主貴族です。彼らは領地内に直営農地を持ち、農民に賦役を課し、領主裁判権・警察権を行使して強力に農民を支配しました。

18 世紀以降はプロイセン王国では、貴族階級が中心となり、官僚や軍人を独占してドイツ帝国を支えました。実際、ドイツでは非常に長く、小国分立状態が続きました。

ユンカー制度は形を変えて第二次大戦の終わりまで生き残り、ナチスドイツのある種の軍事的基盤にもなったと言われています。

ポーランドも王権が弱く、封建領主である貴族が百も二百も分立して、国内がまとまらなかったために、結局、独逸露



第一次世界大戦後のヨーロッパ

ユーラシアの帝国時代の終焉と欧州の構造変化

第一次世界大戦は、1918 年 11 月 11 日、ドイツの降伏で終了しました。この結果、16～17 世紀（あるいはその前後）からユーラシアで大きな力を振るった帝国のすべてが崩壊・消滅しました。

ドイツ帝国、オーストリア・ハンガリー帝国、オスマン帝国、ロシア帝国などです。さらにインドのムガル帝国はイギリスの植民地＝英領インドとなって消滅（1858 年）、中国の清国も欧米列強の侵蝕の中で倒れました（1911 年辛亥革命）。

ただし、ロシア帝国はロシア革命で崩壊したけれど、ソ連邦という社会主義国家が生まれ、ここに帝国の機能が形を変えて残されました。現在のウクライナ戦争は、「ロシア帝国」の崩壊過程がいまだに続いている一面があるとも言えます。

帝国の崩壊によって、第一次世界大戦後、ドイツ・オーストリアの支配下にあったスラヴ、バルトの小国が、米ウィルソン大統領の提唱する「民族自決権」を背景に、一斉に独立を達成していくことになります。

しかし、多くの民族が入り組んで集住している地域において境界線を定めるのは極めて難しく、その境界線決定による不満や不公平意識から紛争の源は残ったままでした。

とくに分裂の歴史をたどってきたスラヴ民族の国家・国境制定は、多くの問題を残したままでした。その後ベルサイユ体制下のドイツの復興とヒトラー政権の出現などを経て、第二次世界大戦と微妙に絡みあっていくことになります。

また、東スラヴはロシアが主導するソ連社会主義体制に組み込まれ、ウクライナ、ベラルーシは本当の意味では独立できなかったとも言えるかもしれません。

スラヴ民族賛歌に人生を捧げた画家ミュシャ

第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけて、スラヴ民族主義を高らかに掲げ、「スラヴ叙事詩」という壮大な連作絵画

を描いた人物がいました。アルフォンス・ムハ（ミュシャ）です。

ムハ（ミュシャ）は、1860 年チェコ共和国に生まれました。ウィーンへ行き、舞台装置専門の工房で働いた後、ミュンヘンの美術アカデミーを卒業し、パリへ出ます。大女優サラ・ベルナルが主演する演劇のポスターを制作したところ、それが大評判となり、サラと 6 年契約を結んでアルヌーボー・ポスターをたくさん描いて有名になりました。ミュシャの作品は今でも多くの女性に好まれていて、一度や二度は見た人が多いのではないかと思います。



アルヌーボー画家として成功していたのですが、ある時突然、ムハ（ミュシャ）は「スラヴ民族の偉大な歴史と文化を残さなければならない」と決意します。1909 年、48 歳の時にボストン交響楽団が演奏するスメタナ（チェコの作曲家）の交響詩「わが祖国」を聞いて決断したと言われています。翌年から「スラヴ叙事詩」の制作を開始して、20 年間で 20 点の巨大な絵画を描き上げ、チェコ国民とプラハ市に寄贈し



「スラヴ叙事詩」の巨大な絵画を描くムハ

ました (1928 年)。彼は 1939 年にドイツ軍がチェコに侵攻した直後に逮捕され、その後、肺炎で亡くなりました (79 歳)。

ミュシャはスラヴ民族主義に命を捧げた最後の人物だったかもしれません。第二次世界大戦後、欧州連合 (EU) が構築され、ゲルマン民族主義やスラヴ民族主義の時代は終わったように見えます。しかし、ウクライナでは、現在、ウクライナ西部を中心に、EU 加盟を求めながらウクライナ民族主義が高揚しています。一方、ウクライナの東部のロシア系住民地域では、「ロシア民族主義」が、同じように高揚し、ロシアへの復帰を求めています。

チェコもポーランドもウクライナも、ロシアとぶつかり合っている今の状況では、ミュシャが想い描いた「スラヴ民族賛歌」というようなものは、もはやなくなり、スラヴ民族が統一・団結することはないということかもしれません。

第二次世界大戦

1939 年 9 月 1 日、ドイツ軍がポーランドへ侵攻し、イギリス・フランスが直ちに宣戦布告して第二次世界大戦が始まりました。ソ連は直前の 8 月 23 日に独ソ不可侵条約を結んでおり、その秘密議定書でポーランドの分割占領を合意していました。9 月 15 日、ドイツ軍に続いてソ連軍が東からポーランドに侵攻します。

ドイツ軍は、戦争初期において破竹の進撃を続け、フランス、オランダを占領、東欧諸国も支配下に入れました。この結果、ソ連を除いてスラヴ諸国の大半がドイツに占領されるか、ブルガリア、スロヴァキアのように親独政権を樹立させることになります。

1941 年 6 月 22 日、ドイツ軍は突然ソ連への侵攻を開始し、独ソ戦が始まります。欧州戦線は独伊枢軸国側と英露連合側が対決、これに米国が連合国側につくことで、戦争の帰趨が決まることになりました。ウクライナ、ベラルーシ、バルト 3 国はドイツに占領され、ソ連はモスクワまで深く迫られながら、1941 年の冬をもちこたえ、アメリカの軍事支援を受けながら反撃に転じて、ソ連西部および東欧諸国を解放しました。

一方、米英連合軍はノルマンディ上陸作戦でフランスはじめ西欧諸国を解放し、1945 年 5 月のソ連軍のベルリン陥落で第二次大戦・欧州戦線は終結しました。

第二次世界大戦終了後の世界

第二次世界大戦後、世界はソ連を中心とする社会主義諸国と米国を中心とする資本主義諸国に分かれました。東西世界対立と言われ、「冷戦時代」が始まります。おおむね第二次世界大戦終了時の占領線が東西を分ける境界線となり、チャーチル英首相が「鉄のカーテン」と呼んだ東西分断が起きました。欧州では米欧中心の軍事同盟 NATO (北大西洋条約機構) とソ連を中心とする WATO (ワルシャワ条約機構) の二

つが軍事的に対峙することになりました。

スラヴ民族の大半はソ連軍占領地域に入っており、東欧ではさらに東ドイツ、ルーマニア、ハンガリーといったスラヴでない国もソ連社会主義陣営に入ることになりました。しかし、「ハンガリー動乱」(1956 年)、「プラハの春」(1968 年)、「ポーランドの連帯運動」(1980~82 年)、そして「ペレストロイカ」(1985~91 年)といった様々な問題が起きて、「ベルリンの壁」崩壊 (1989 年) とソ連邦解体 (1991 年) でソ連社会主義体制は終焉を迎えました。

西スラヴ諸国は親西欧陣営に向かい、南スラヴはユーゴスラビアを中心に国家分裂が起きて内戦状態になりました。最後まで残っていた東スラヴでは、今、遅ればせながらロシア・ウクライナ戦争が起きています。

第二次世界大戦初期

(1939 年 - 1941 年)



第二次世界大戦後の東西対立世界

スラヴ諸国の大半がソ連社会主義圏に入ることになる



ウクライナ近現代史

第二次世界大戦後のヨーロッパでもう 1 つ重要なのは EU (欧州連合) なのですが、時間がなくなってしまいました。最後にウクライナの近現代史に触れて話を締めくくりたいと思います。

これまでの話で、ウクライナについては、キエフ・ルーシ

時代以外はほとんど説明しませんでした。なぜかと言うと、国家ができなかったからです。13 世紀のモンゴル支配の後、20 世紀に入るまで、東スラヴのウクライナ地域では、ほとんど、国というまとまりが作られませんでした。結局、ウクライナという国家が現在の形になったのは、第一次世界大戦とロシア革命後です。様々な戦争と国家独立の動きが起き、最終的に、ソ連という連邦国家が構築される中で、「ウクライナ社会主義共和国」が生まれました。

キエフ公国以降、蒙古軍の襲来に始まり、リトアニア公国の南下、ポーランド・リトアニア連合の支配、さらにロシアの発展・拡大が押し寄せ、ウクライナが自立した国家となることができない期間が長く続いたということになります。

また、ウクライナの地で、ロシアとポーランド・リトアニアが支配を広げるためにぶつかり合いました。これはカトリックと東方正教会のぶつかり合いでもあります。ウクライナ地域について言えば東ウクライナと西ウクライナの戦いでもありました。また、南部にはクリミア・ハン国というオスマン帝国（イスラム教）の影響地域がありました。

つまり、中世から近世の時代変革期、ウクライナは宗教的には三分割されていました。ウクライナの大半はロシアの東方正教会地域で、西ウクライナ（ガリツィア）はギリシャ・カトリック教会地域、クリミアはイスラム系タタール系住民の地域でした。

ギリシャ・カトリック教会というのは、東方典礼カトリック教会とも言われ、経典は東方正教会で、組織的にはローマ法王のカトリック教会に属するキリスト教会です。その分裂・対立の歴史は、今も残されています。

第一次大戦とウクライナ

第一次世界大戦ではロシアとドイツがぶつかり、ウクライナを囲む四つの帝国（独露奥オスマン）が崩れました。帝国時代が終わり、ウクライナでは民族主義が高揚し、大きな転機が訪れます。ロシアの 2 月革命の影響を受けて中央ラーダという自治組織が結成されるのですが、10 月革命のあと中央ラーダはボリシェビキ政権と対立、革命軍（赤軍）と反革命

軍（白軍）がぶつかり合うなかで、貧農を中心とするマフノ農民軍や中央ラーダ軍など様々な武装勢力がウクライナ全土で戦乱状態を繰り広げました。

さらにオーストリア帝国の瓦解によりポーランドとウクライナの住民衝突が起こります。中央ラーダから「ウクライナ人民共和国」が作られ、またガリツィアでは「西ウクライナ人民共和国」が独立を宣言しました。しかし、ガリツィア（西ウクライナ）軍はポーランドに敗北してその支配下に入り、中央ラーダ（ウクライナ人民共和国）軍は赤軍に平定されて、ウクライナ社会主義共和国へと吸収され、1922 年に成立したソ連邦に組み込まれました。

結局、第一次世界大戦とロシア革命の結果、ウクライナ国民の統一は成立せず、ウクライナが自立へと動くのはソ連崩壊後になったわけです。ソ連邦成立以降に、ウクライナの領土がどう変わったかを示したのが左の図です。

第二次大戦とウクライナ

第二次世界大戦で何が起きたかと言うと、まず 1939 年 8 月の独ソ不可侵条約とドイツ軍およびソ連軍の侵攻でポーランドが分割され（同 9 月）、ガリツィアはソ連の勢力圏となりウクライナに併合されました。

しかし、その後、ドイツがソ連に攻め込んで独ソ戦が勃発（41 年 6 月）。ドイツ占領下のウクライナでは対独抵抗軍が組織されました。しかし、西ウクライナのガリツィアではウクライナ民族主義者組織（OUN）の指導者ステパン・バンデラ率いるウクライナ自由軍（OUN 軍）がドイツ軍側につき、西ウクライナのバンデラ軍は、ナチス・ドイツに協力してユダヤ人を虐殺しただけでなく、ロシア人もたくさん殺害しました。

このバンデラを民族の英雄として信奉するウクライナ民族主義者（バンデラ主義者）を、現在、プーチン大統領は「ネオ・ナチ」と呼んでおり、ウクライナ紛争の背景には、このネオ・ナチの大きな動きがあったと主張しています。

ただ、ドイツ軍に従ったバンデラ自由軍は、その後ウクライナの独立を宣言します（1941 年 9 月）。しかし、ドイツ軍

ウクライナ領土の拡大 1922 年～1954 年



西ウクライナの過激な民族主義者

ナチス・ドイツのカギ十字、アゾフ大隊、北大西洋条約機構(NATO)の三つの旗を掲げている。



は独立を認めず、バンデラは逮捕されて、ザクセンハウゼン収容所に送られました。ウクライナの民族主義者たちは 1942 年にウクライナ蜂起軍 (UPA) を樹立し、反ソ・反独の戦いを続けます。第二次大戦後もウクライナ蜂起軍はガリツィア地域で反ソ・パルチザン闘争を続け、10 年間にわたって抵抗を継続しました。

ソ連崩壊後、西ウクライナでは再び過激な民族主義が生き返ります。ソ連崩壊後に、私は西ウクライナへ行ったことがあります。車で走っていくと、地域全体に黄色い旗がはためいていました。黄色の旗はソ連 (ロシア) との戦いのシンボルです。これはちょっとやそつとでは、抵抗は止まらないだろうなと思ったものです。

一方、当時の東ウクライナでは、まったく別の雰囲気で、黄色の抵抗の旗を見ることは一切なかったです。

ロシアのプーチン大統領は「ネオ・ナチ」と呼び、ウクライナ西部の過激な民族主義者たちの行動を、特別軍事作戦を開始した理由の一つに上げました。

現在のウクライナ政府は、彼らはたいした勢力ではなく、政治的な力はないと説明しています。しかし、写真のような人たちがいることは事実です。ナチス・ドイツのカギ十字、アゾフ大隊の旗、北大西洋条約 (NATO) の旗。この 3 つを掲げ、武装し、ウクライナの独立とロシアへの批判を主張しています。

今日のウクライナ戦争の背景には、スラヴ民族の分裂と紛争の長い歴史があります。スラヴ民族だけでなく、ヨーロッパの諸民族・諸国家との関係や近現代の歴史を踏まえて、今後の国際秩序を考えていく必要があると思います。(了)

<補遺>

欧州連合 (EU) とプーチン大統領のユーラシア統合構想

第二次世界大戦後のヨーロッパでは、戦後復興を支えるために欧州石炭鉄鋼共同体 (ECSC) が 1952 年に設立されました。背景には、独仏は「二度と戦争をしない」との思いがありました。参加国は、ベルギー、オランダ、ルクセンブルグ、フランス、西ドイツ、イタリアの 6 カ国です。

次いで、これを母体に成立したのが、欧州経済共同体 (EEC/1958 年)、欧州共同体 (EC/1967 年) です。その後、イギリス、アイルランド、デンマーク、ギリシャ、スペイン、ポルトガルの 6 ヶ国が加わって「拡大欧州共同体」(12 カ国) となりました。

この拡大欧州共同体が、東西冷戦終結 (1989 年) とソ連崩壊 (1991 年) を受け

て改組され、欧州連合 (EU) へと成長・拡大していきます。欧州連合自体は、1993 年のマーストリヒト条約の発効でスタートします。その後、1999 年の欧州統一通貨「ユーロ」の導入で、欧州全域から多くの国が加盟を申請し、欧州連合は当初の 12 カ国から現在は 27 カ国に拡大しました。

旧ソ連圏からはバルト三国 (リトアニア、ラトビア、エストニア) が 2004 年に加盟し、スラヴ圏からは、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、スロヴェニア (同 2004 年)、クロアチア (2013 年) の 5 カ国が加盟します。

現時点での加盟候補国は、ボスニア・ヘルツェゴビナ、モンテネグロ、北マケドニア、セルビア、ウクライナ、モルダヴィア、アルバニア、トルコの 8 カ国となっています。また、ジョージア (グルジア) も加盟申請し、今回のウクライナ戦争でその動きが強まりそうな勢いです。

残されたのはロシアとベラルーシです。なかでも、ロシアは欧州から追放され、村八分にされたような状況です。しかし、ロシアは本当に欧州の一部ではなくなったのか？欧州連合と NATO はどこまで欧州を広げるつもりなのか？という疑問は消えていないです。

欧州連合では、リーマンショックによる世界的な経済不況や難民問題への対処などで、加盟国の不満や批判が続出しました。2020 年、英国の国民投票で欧州連合脱退という大きな事件が起きました。ウクライナ戦争では、一時的に欧州連合の問題がなくなったように見えますが、根本的な問題解決にはなっていないと思います。

プーチン大統領は、欧州との統合が無理になったことで、東方政策へと方針を転換しました。旧ソ連諸国を統合するユーラシア経済連合をはじめ、様々な統合案を発表し、域内協力構想を進めました。ただ、プーチン大統領は欧州との関係を拒否したわけではなく、ロシアが欧州連合に入る拡大欧州、大欧州、欧州同盟等の構想も発表していました。

さらに、上海協力機構やユーラシア経済連合を軸に「大ユーラシア・パートナーシップ構想」を打ち上げ、ユーラシア



全体の統合を最終目標に掲げました。

一方、ウクライナ戦争が続く中で明らかになってきたことは、BRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ）に代表される新興諸国や上海協力機構、アフリカ連合など、いわゆるグローバル・サウスの力が強まっていることです。世界は欧米でまとまっている時代は終わりつつあります。スラヴ諸国も欧州連合に入るだけで経済発展ができるのか、大きな問題を抱えています。

そして、ウクライナ戦争で明らかになってきたのは、超大国・米国の力が弱まっており、その一方で、ロシアも、今や世界秩序を維持する力は持っておらず、双方とも、ほころび始めた世界を立て直すことができなくなっている現実です。

超大国が世界を支配し、秩序を確立した「二極世界時代（もしくは、米国一極時代）」が終焉を告げ、超大国が力を失いつつある時代に入っています。ウクライナ戦争の始まりの背景でもあり、ウクライナ紛争がなかなか終結しない理由にもなっています。

近い将来、新世界秩序時代が出現し、平和と安定の世界を作り出す可能性はあるかもしれませんが、その可能性は、まだ見通すことができず、混乱が続く可能性が強いと思われます。逆に、ウクライナ戦争、アルメニア・アゼルバイジャン紛争、イスラエル・ハマス戦争など、様々な紛争が世界のあちこちで噴出しています。

そして、台湾を含む米中対立が最後にやってくるかもしれません。世界は地政学的地殻変動の大きな揺れが始まった雰囲気でもあります。その分裂は、地盤が弱い地域から始まり、世界に広がる可能性が強いと思われます。過去 2 度の世界大戦は、スラヴ民族地域から始まりました。大きな亀裂が再び、スラヴ地域で始まり、世界的混迷へと突入する可能性は捨てきれません。第三次大戦が欧州で始まるということがないように祈るばかりです。

＊ ＊ JIC のロシア語留学 ・ 研修 ＊ ＊

35 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 35 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 4,500 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ことや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様にバツアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学 4 月生 ・ 募集中



**オンライン
相談 受付中!**

期間：2024 年 4 月 1 日より 10 ヶ月

締切：2024 年 1 月 12 日

モスクワ国立大学 1,158,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

サンクト・ペテルブルグ国立大学 1,039,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

ゲルツェン教育大学 908,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

ウラジオストク極東連邦大学 418,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

ミンスク国立言語大学 422,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金
および取得手数料などががかかります。

**ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です！
(中央アジア、バルト諸国など)**

◆ JIC ロシア留学デスク ◆

電話またはメールでご連絡ください。

東京事務所 平日 9:30-16:30 03-3355-7294

※留学相談はオンラインで行っております(要 事前予約)

◆◆ 編集後記 ◆◆

▼本号も、講演録、日ロ交流情報、本の紹介、黒田龍之助さんの連載コラムと盛りだくさんです。▼石郷岡建氏の講演録「スラヴ民族一分裂と紛争」は圧巻です。一気に読むには読みごたえがありすぎますが、諸民族の長い歴史のなかで、イデオロギーよりも宗教や民族意識・民族感情というものがどれほど強い影響力を持ち、それぞれの国の在り方に反映されるものか、深く考えさせられました。▼ウクライナ戦争がいつ、どのような形で停戦・和平を迎えるか、明確に予測することはできませんが、戦況の膠着と米欧の「支援疲れ」、パレスチナでの戦火拡大など、早期停戦を求める国際世論の圧力は今後ますます強まるだろうと思われまます。停戦交渉ができるだけ早く始まることを願います。▼戦争の長期化で、日ロの経済的・文化的交流は細り続けています。多くの日本人がロシアを危険な国と思っているのは仕方のない現実ですが、ロシアは厳然として日本の隣に存在しています。危険な国であればあるほど、その内情を知り、つきあい方を考えなければなりません。そのためにも、私たちは日ロの人的交流・文化・学術交流を絶やさぬよう、今できることをやり続ける必要があります。

本年もよろしくお願いいたします。(F)

